

八尾市文化財調査報告 58

平成19年度国庫補助 高安古墳群等調査事業

高安古墳群 分布・測量調査報告書

郡川地区詳細分布調査

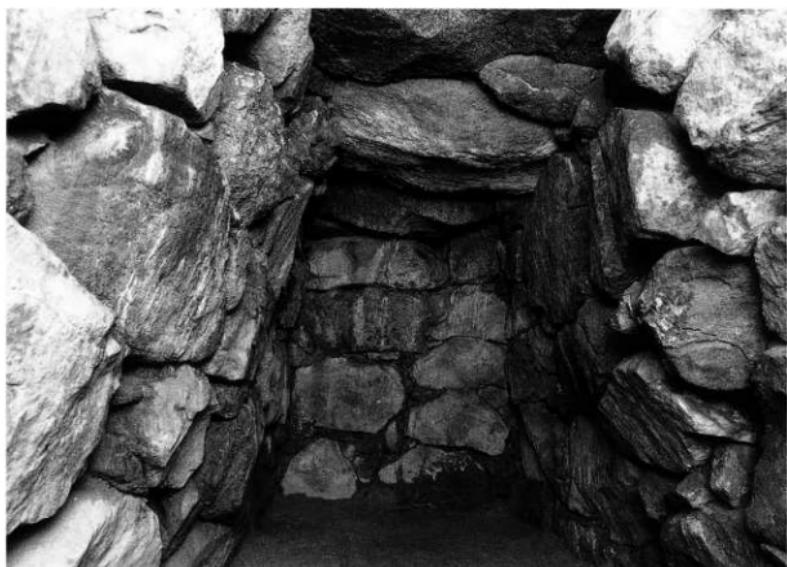
市史跡大窪・山畠7号・8号墳測量等調査 他

2008年3月

八尾市教育委員会

八尾市文化財報告58正誤表

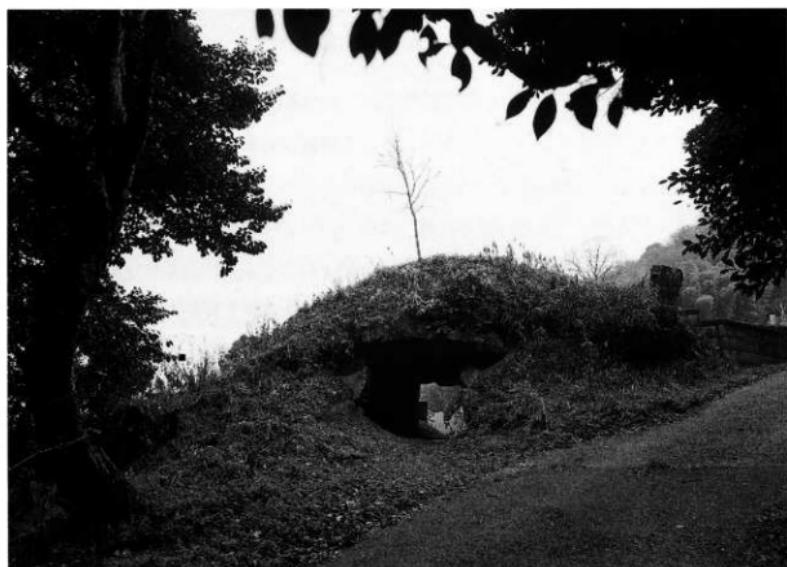
頁	表2欄	誤	正
5	郡15号文献番号	(7) (8)	なし
	郡16号文献番号	なし	(7) (8)



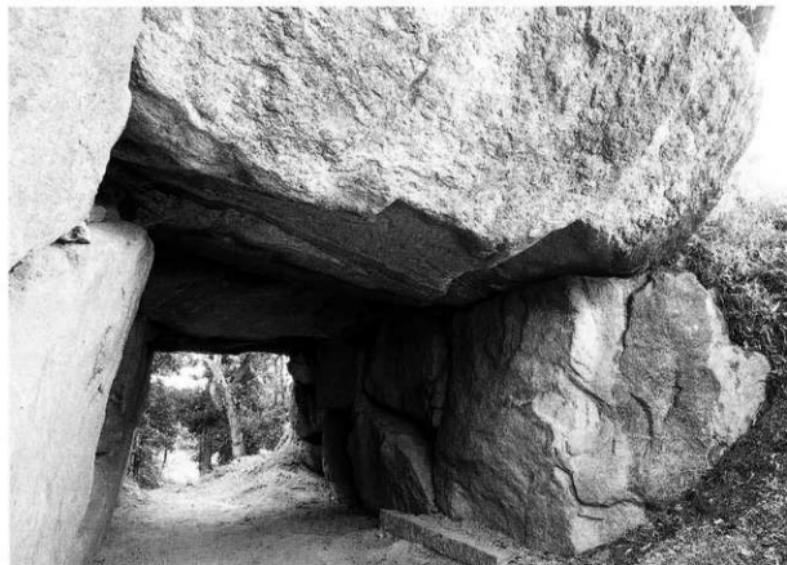
大塚・山畠 8号墳 玄門から奥壁方向



大塚・山畠 8号墳 玄室から羨道方向
(撮影・河南辰秀氏)



大塙・山畠7号墳(抜塚)墳丘(南西から)



大塙・山畠7号墳(抜塚)玄門から義道方向
(撮影 阿南辰秀氏)

はじめに

八尾市の東側を画する生駒山麓には、高安古墳群をはじめとして、300基以上の古墳が残されております。古代の豪族の墓域として、全国的にも有数の古墳の集まる地域であります。八尾市教育委員会では、平成15年度から、これら高安古墳群をはじめとする山麓の貴重な文化財である古墳について、広く市民に親しんでいただける場となるよう、保存調査を進めてまいりました。

本年度は、高安古墳群で最大クラスの横穴式石室の一つであったと推定される大窪・山畠7号墳と古墳群の造墓開始のまもない墳の古式石室である大窪・山畠8号墳の調査を行い、平成19年度の市指定史跡といたしました。高安古墳群の市史跡は、郡川の開山塚古墳と周辺の4基の古墳、服部川の二室塚古墳に、今回の2基を加えて、8基を数えることとなりました。これらは、「高安千塚」ともいわれる高安古墳群の集中地域の各地区にあります。高安古墳群を知っていただく場として、市民をはじめとする多くの方々に親しまれる場となることを願ってやみません。

また、本年度は、高安古墳群の郡川地区の詳細分布調査を行いました。今回の調査で「高安千塚」ともよばれる高安古墳群の集中地域の分布調査はすべて終了し、集中地域では、225基の古墳と、246箇所の古墳状地点を確認することができました。これらの成果は、全国でも有数の群集墳としての高安古墳群の重要性を再認識させるものであります。今後は、高安古墳群集中地域の保存・活用に向けて、保存計画の策定を進めてまいる所存であります。

最後になりましたが、今回の調査を行うにあたり、深いご理解とご協力をいただきました関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成20年3月

八尾市教育委員会

教育長 中原敏博

例　　言

1. 本書は、八尾市教育委員会が、国庫補助事業（重要遺跡確認・保存目的）で行った高安古墳群の郡川地区における詳細分布調査及び大塹に所在する大塹・山畠6号・7号・8号墳の墳丘測量調査他の報告である。
2. 調査は、八尾市教育委員会文化財課（課長 岸本邦雄）が主体となって行った。
3. 詳細分布調査にあたっては、郡川地区の方々にご協力をいただいた。また、黒谷の日蓮宗本照寺、郡川の曹洞宗法藏寺にご協力いただいた。服部川7号墳の石室の写真撮影については、所有者である山中山樹園にご協力をいただいた。記して厚くお礼申し上げます。
4. 大塹・山畠6号・7号・8号墳の調査にあたっては、大塹に所在する淨土宗来迎寺に多大なご協力をいただいた。記して厚くお礼申し上げます。また、野洲市教育委員会の花田勝広氏が作成された実測図面を、報告書等で使用させていただいた。さらに、本報告中の表2の古墳一覧表における石室の計測値は、石室が一部しか残存していないものを除いては、氏の実測図の計測値を使用させていただいた。貴重な資料を、高安古墳群の保存調査のために、ご提供いただきましたことを、厚くお礼申し上げます。
5. 黒谷10号墳は平成17年度の調査で確認された古墳であるが、高安古墳群中でも古式の石室として重要な古墳であり、このたび報告を掲載した。本調査は、（財）八尾市文化財調査研究会の高萩千秋が調査を行い、本報告の執筆を行った。
6. 調査及び調査計画にあたりましては、「高安古墳群と山麓の古墳保存・調査計画検討会議」の白石太一郎氏・増渕徹氏・一瀬和夫氏・高橋照彦氏・花田勝広氏・安村俊史氏・若松博恵氏・森屋直樹氏・岡田賢氏にご指導をいただいた。また、大塹・山畠7号・8号墳の調査と指定について、八尾市文化財保護審議委員の村川行弘氏・白石太一郎氏・井藤徹氏のご指導をいただいた。
7. 現地調査にあたっては、調査補助員として松江信一・大西進・川村一吉が参加した。
また台報整理や古墳一覧表の作成等の作業は、松江信一が行った。遺物の実測は、調査補助員・吉川一榮が行った。
8. 大塹・山畠6号・7号・8号墳の墳丘測量と石室図面のレベル記入・トレースは、株式会社相互技術に委託した。
9. 卷頭写真及び写真図版の一部の写真是、阿南写真工房 阿南辰秀氏の撮影である。写真図版の郡川11号墳の1998年の写真と郡川16号墳の2000年の写真是、松江信一氏の提供である。
10. Ⅲの黒谷10号墳以外の項の調査担当及び執筆と本書の編集は、文化財課技師吉田野乃が行った。
11. 八尾市教育委員会では、今回の調査成果をもとに、高安古墳群大塹・山畠7号・8号墳について、平成19年度の八尾市指定史跡として指定した。

本　　目　次

I. 高安古墳群（郡川地区）詳細分布調査報告.....	1
〈付載1〉 服部川80号墳表面採集の石棺材.....	12
〈付載2〉 服部川7号墳の写真撮影.....	13
II. 高安古墳群 大塹・山畠6号・7号・8号墳の測量等の調査報告.....	14
〈付載〉 来迎寺境内の石棺材.....	24
III. 高安古墳群 黒谷10号墳の調査.....	25

I. 高安古墳群（郡川地区）詳細分布調査報告

1. 調査の経緯

高安古墳群は、八尾市の生駒山麓に分布する6世紀代を中心に造営された横穴式石室を主体とする群集墳である。特に、「高安千塚」とも称される高安古墳群の集中地域は、横穴式石室の規模の大きさにおいても全国的にも有数の群集墳であり、学史上も著名な古墳群である。このことから八尾市教育委員会では、この古墳群について、国指定化を目指した保存計画を策定するため、詳細分布調査を行うこととした。

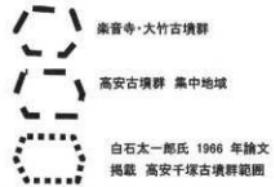
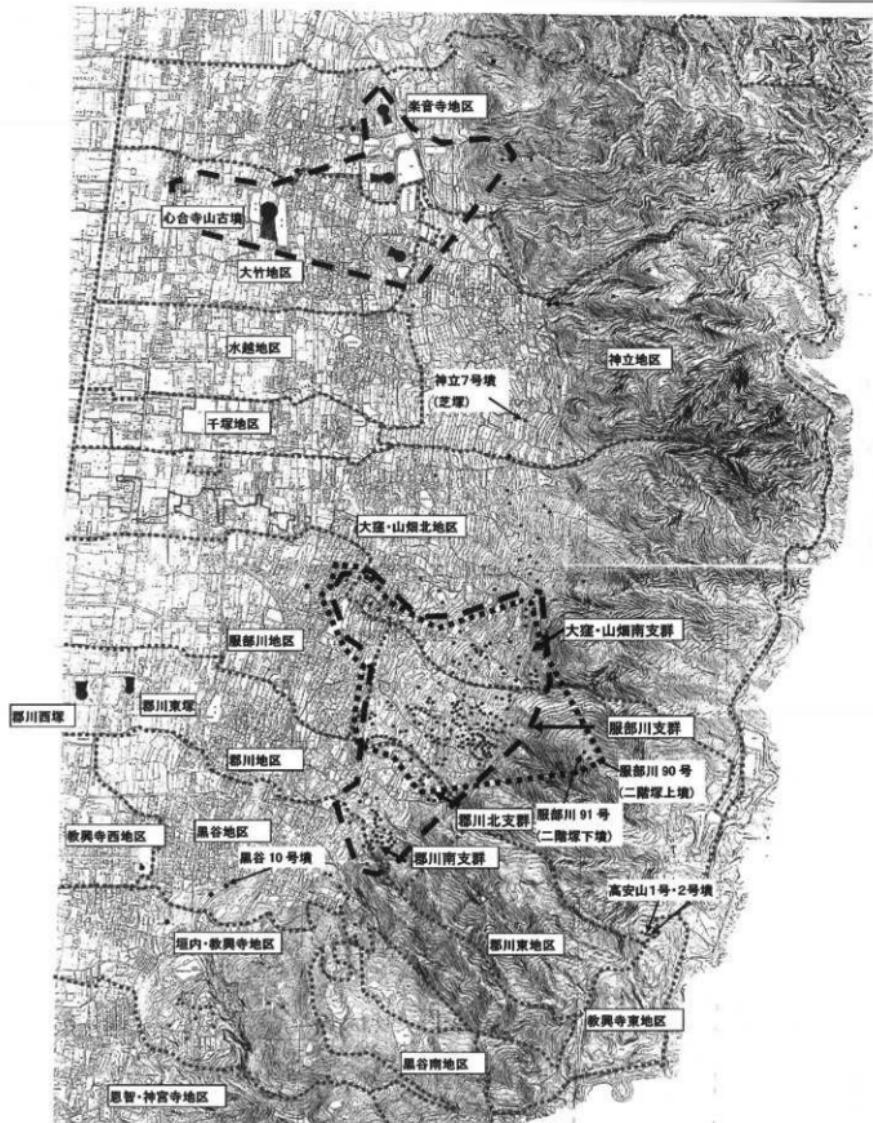
詳細分布調査は、高安古墳群が最も集中する地域である服部川地区について、平成15年度から開始し、平成16年度から文化庁国庫補助事業で調査を行っている。平成17年度に服部川地区を終了し、平成18年度は、大窪・山畑南地区を行った。本年度は、服部川地区の南側にある郡川地区の調査を行った。本年度をもって、高安古墳群集中地域の詳細分布調査はすべて終了した。集中地域では、225基の古墳と246箇所の古墳状地点を確認したこととなる。

なお、本市では、山麓全体に分布する後期古墳について、高安古墳群の遺跡名を付しているが、「高安千塚」といわれる集中地域は、周辺の後期古墳とはその立地や性格を異にする古墳群である。このことから現在遺跡名の変更を検討しているが、混乱をさけるため、表1に現在の名称とこれまでの先学の研究による名称の対応関係を示した。

2. 詳細分布調査の方法と概要

郡川地区については、第2図で示した範囲について、網羅的な調査を行い、地区ごとの古墳番号を付した。本地区では、郡川30号墳と郡川35号墳が、行政区画上は黒谷地区に所在するが、分布状況からみて、郡川の支群に含めるべきであると判断されたため、郡川地区的番号を付している。また、今回の詳細分布調査の範囲において新たに確認した黒谷7号・8号墳は、行政区画上は、黒谷地区と郡川地区にまたがっているが、これらについては、黒谷の支群に含めるべきものであるため、黒谷地区的番号を付し、郡川地区以外ではあるが、新規確認古墳であるため、本報告に掲載した。本地区的古墳の分布については、高安古墳群集中地域の郡川支群と捉えられるものであるが、郡川1号墳をはじめとする6基が分布する郡川の北支群と郡川6号～37号墳が分布する郡川の南支群に分かれる。これについては、石室形態の特徴などを検討したうえで、高安古墳群集中地域全体の支群分け作業のなかで、今後さらに検討していく必要がある。

調査の方法は、500分の1の地図に古墳の位置を記し、墳丘及び石室の略測図の作成と写真撮影を行い、台帳としてまとめた。また、今後の開発事業等に対応するため、現状を見て古墳となる可能性のある地点については、古墳状地点として、地図に位置を記した上で、台帳作成・写真撮影を行った。なお、地点番号については、地区ごとの番号ではなく、詳細分布調査全体での続き番号となっている。詳細分布調査の現地作業は、平成19年12月4日から平成20年2月28日までの実働15日間で行い、既に確認されている古墳を含め42基の古墳と57箇所（地点番号194～253・うち3地点は欠番）の古墳状地点を確認した。郡川文群は、北支群では、松尾谷に面する北西方向に延びる尾根上に古墳が分布する。現在では法藏寺境内付近に6基を確認するのみであるが、今回新規に確認した尾根西端の郡川42号墳や、尾根上に連続して確認した古墳状地点のありかたから、本来は、尾根上に連続して十数基の古墳が築造されていたものと推定される。郡川南支群では、現在、近鉄西信貴ケーブル線により地形が分断されているが、北西方向に延びる尾根上に連続して古墳が造られていたものとみられ、ケーブル線付近では消失した古墳の石材の残存がみられる。古墳の分布は、標高110m～140mの尾根上に集中し、標高140mより上では、傾斜が急速に強くなり、古墳の分布はみられなくなる。また、標高110m以下では、石垣によって囲まれた雑墳として開墾されている。本来はこの緩傾斜地にも古墳が分布していたかとみられるが、現状では、僅かに古墳と古墳状地点を確認したのみである。また、今回の調査で、郡川北支群と南支群の間の位置で、郡川40号・41号墳を新規に確認した。これらは横穴式石室を主体部としない後期古墳以外の古墳である可能性もあるが、墳丘は明瞭に確認できる。



第1図 高安古墳群全体地区割図

八尾市教育委員会（2008年現在の名称）		高安古墳群の古墳の数（山麓全体の後期古墳）	高安古墳群集中地域の古墳数	白石太一郎氏（1966年論文）	花田勝広氏（2008年論文）
高安古墳群周辺地域	楽音寺地区	5			
	大竹地区	0			
	神立地区	7			神立古墳群
	水越地区	0			
	千塚地区	0			
	大窪・山畠北地区	11			高安千塚・大窪・山畠北支群
高安古墳群集中地域	大窪・山畠南支群	48	225	高安千塚古墳群・山畠支群	高安千塚・大窪・山畠南支群
	服部川支群（二階塚上墳・下墳を含む）	135		高安千塚古墳群・服部川支群	高安千塚・服部川支群
	郡川北支群	6			高安千塚・郡川支群
	郡川南支群	36			
高安古墳群周辺地域	郡川東地区	2			
	教興寺西地区	2			
	黒谷地区	18			黒谷古墳群
	垣内・教興寺地区	20			垣内・教興寺古墳群
	黒谷南地区	3			
	教興寺東地区	0			
	恩智・神宮寺地区	8			恩智・神宮寺古墳群
高安山1～3号墳		3			
	計	304	225		

*本表の古墳数は、平成20年3月現在の数であり、高安古墳群集中地域（服部川支群・大窪・山畠南支群・郡川支群）の詳細分布調査を完了した段階の数である。他の地域は、詳細分布調査を行っていないため、他の調査で確認されていても数に含めていないものもあり、今後の調査により増加するものとみられる。

*神立に所在する愛宕塚古墳は、独立墳としての性格を有する古墳であり、本表の数には含めていない。

表1 高安古墳群（八尾市山麓の後期古墳）の古墳数と名称の対照（平成20年3月現在）

番号	古墳名	埴丘			形式	石室								保存状況		
		法量(基準:m)		現存部での法量・単位:m)		玄室				横道						
		埴丘径 (現存径)	埴丘高 (現存高)			石室長	長	幅	高	長	幅	高				
郡1	開山塚・法藏寺境内1号墳	円墳	30	5.8	両袖	13.05	4.67	3.37	4.2(推定)	8.38	1.5	1.9(推定)	S-54°-W	良好		
郡2	法藏寺境内2号墳	円墳	14	4.3	右片袖	7.5	3.2	2.2	2.9	4.3	1.2	1.7	S-20°-W	良好		
郡3	法藏寺境内3号墳	円墳	15	4.6以上	両袖	9.7	3.4	2.4	3.7	6.3	1.3	1.8	S-57°-W	良好		
郡3	法藏寺境内3号墳	3号墳埴丘内	-B号墳	無袖	4.5	3.7	0.95	0.8	0.8	0.7	0.8	0.8	S-51°-W	やや良好		
郡4	法藏寺境内4号墳	円墳	22	5.5~6	不明	8前後(推定)	4前後(推定)	2.4	3前後(推定)	不明	不明	不明	S-37°-W	良好		
郡5		円墳	12	2		不明								不明		
郡6		円墳	15.2	4	不明	6以上(推定)	不明		3.3以上(推定)	1前後	不明	S-30°-W付近	良好			
郡7		円墳	21	5.5		不明								S-50°-W		
郡8		円墳	12.3	2.9	不明	6.5	不明									
郡9		円墳	17.5	3.3	両袖	6.2	3.8	2.4	2.5	2.4	1.3	0.9	S-60°-W	良好		
郡10		円墳	18.8	6.7	右片袖	8.2	3.4	2.4	2.7	4.8	1.6	1.6	S-60°-W	非常に良好		
郡11	爻瓦二室塚古墳	円墳	12~15m 前後か	3~4m前後 後	前 左片袖 後 右片袖	11	前2.9 後3.7	後2.8 後2.3	前2.4 後2.8	3.2	1.8	2	S-70°-W	良好		
郡12		円墳	12m前後 (推定)	4m前後 (推定)	右片袖	6.4	4.1	2.4	2.8	2.2	1.2	1.4	S-80°-W	良好		
郡13		円墳	9.1	2.5	不明	不明								南付近か 全塚		
郡14						不明								全塚		
郡15		円墳	11	5.5	右片袖	8.1	3.8	1.8	1	4.4	1.2	1.2	S-80°-W	やや良好		
郡16		円墳	15	3.5	右片袖	8.2	3.8	2.8	3.8	4.3	1.4	1.6	S-20°-W	非常に良好		
郡17		円墳	13.6	4.7	右片袖	7.8	3.5	2.2	2.2	4.3	1.6	1.6	S-80°-W	非常に良好		
郡18		円墳	21	5	右片袖	7.2	3.8	2.6	2.9	3.2	1.9	1.5	S-80°-W	非常に良好		
郡19		円墳	13.6	4.7	右片袖	4.3	3.8	2	1.9	0.5	1.4	0.2	真西	良好		
郡20		円墳	11.1	3		不明								S-20°-W か		
郡21		円墳	13.3	3.9	右片袖か	5.5	3.2	不明	1.6	2.8	不明	1.2	S-40°-W	半塚		
郡22		円墳	10.9	3.3	右片袖	5.6	2(保存部)	2.4	1.6	3.5	1.5	1.3	S-40°-W	やや良好		
郡23		円墳	11	1.6		不明								半塚		
郡24		円墳	11.2	2.5	右片袖か	4.3	4	2前後か	1.4	0.3	不明	不明	S-40°-W	半塚		

表2 高安古墳群 郡川地区古墳一覧表

番号	既往調査の古墳番号					古墳の現状・特記事項他	文献番号	既往の測量・実測等調査	図3での古墳の位置
	市文化財調査目録 (平成5~6年)	古文書財台帳 (昭和35~39年)	大蔵府教育委員会 (昭和31~平成2年)	中田道跡調査委員会 (昭和41~43年)	白石大~鶴北 (昭和46~47年)				
郡1 124号墳	142号墳	郡3	郡川24号墳	247号墳	147号墳	法皇寺墓苑内。墳は北側と南側に手受けを受けるが石室開口部付近は良好な保存。堆頂には整備され、玄室部分が石片・石棺蓋が散在。E・S・モース他調査。	(1) (4) (5) (11) (12)	津井浜三丘石室宝塚 山崎地二丘石室宝塚 八尾市教委 平成16年度実測・実測調査	2A区
郡2 126号墳	141号墳	郡2	郡川30号墳			法皇寺墓苑内。山林。昭和53年調査により、組合せ式変形石室・土室跡・斜口・後壁透出。後壁部に木棺跡。墳頂部に石室蓋出土。	(2) (4)	八尾市教委 昭和53年度実測・実測調査	2A区
郡3 128号墳	140号墳	郡1	郡川22号墳	265号墳		法皇寺墓苑内。山林。天井石露出。丘庄北面・西側斜平を受けるものとの見立てにも似て良いが、昭和53年調査により、墳頂部出土。	(2) (4)	八尾市教委 昭和53年度実測・実測調査	2A区
郡3-8						法皇寺墓苑内。山林。郡川3号墳と南側に付接された小型石室で、昭和53年調査により、刀子・削竹・二重屋根・築堤部出土。組合の右に穴に蛇形・柱頭・圓頭・圓窓・圓孔等の複数の装飾が施されている。	(2)	八尾市教委 昭和53年度実測・実測調査	2A区
郡4 125号墳	143号墳	郡4	郡川24号墳	248号墳	140号墳	法皇寺墓苑内。山林。本塚は丘庄北側・東側・西側斜面に亘る一部に削平あり。宝室内に柱頭・圓頭・圓窓等の複数の装飾が施されている。	(3) (4)	八尾市教委 平成17年度実測・実測調査	2A区
郡5						法皇寺墓苑内。現在は草叢に遮られるが墓地となっているが、(門内名所調査)には開口部らしく石室蓋みが残されている。周囲に石室蓋。	(1) (4)		2A区
郡6 130号墳	150号墳	郡6	郡川15号墳	255号墳?		山林状(もと植林地か)。天井石露出。石室蓋と上石が露出。朱雀口。墳丘は大きく斜好。			1B区
郡7 131号墳	156号墳	郡15	郡川13号墳	280号墳		山林状(もと植林地か)。墳頂は削平の形態も高さがあり大きい。石室蓋は施していない。周囲に斜接する古墳(33号)を確認。			1B区
郡8 132号墳		郡16	郡川22号墳	251号墳		山林状(もと植林地か)。埴生一石室・西側斜面に削平を受け、左側壁を直した土井兵衛の一部保存。			1B区
郡9 133号墳	161号墳	郡20	郡川10号墳	289号墳		竹林(もと植林地か)。削平に際していた。天井石上部がやや崩落するものの左端・石室とも良好。開口部が残らず、内部に不規則。天井石は土井兵衛の同じ同式。		花田勝広兵石室宝塚	1B区
郡10 134号墳	162号墳	郡21	郡川10号墳	270号墳		山林状(もと植林地か)。埴生一石室・西側斜面をカットした跡があり。埴生・石室や削平・削落あるものの倒して倒れる。		花田勝広兵石室宝塚	1B区
郡11 136号墳	169号墳	郡17	郡川9号墳	264号墳		石室蓋は裏に隠された木棒結構。現在、開口部は削平され、石室内外へ。埴生・天井石2石が露出。石室は特有な二室構造。後述大字埋没。	(5) (6) (12)	山崎地二丘石室宝塚 高畠地井石室宝塚 花田勝広兵石室宝塚	1B区
郡12 138号墳	189号墳	郡18	郡川7号墳	285号墳		削平された場所で、埴生・石室上・中や削平・削落あるものの多く剥落して倒れて、周囲は半平地。		花田勝広兵石室宝塚	1B区
郡13 137号墳						山林状(もと植林地か)。天井石2枚が埴生付近に古墳があり、埴生の一部と、被破された石室石材を暴露した跡跡とどちらとも。			1B区
郡14 138号墳	191号墳		郡川1号墳	252号墳?		巨石の石材が散在する。原生藪にはないとみられる。ターピング附近の埴生が被破され、あつたものが残されている。			1B区
郡15 139号墳	188号墳	郡10	郡川12号墳	256号墳		山林状(もと植林地か)。石室上・中・下部が埴生。天井石はやや起立のアラブ式。	(7) (8)	花田勝広兵石室宝塚	1B区
郡16 129号墳	149号墳	郡8	郡川16号墳	254号墳?		山林状(もと植林地か)。ドーム状の高い天井石を持像とする式石室。埴生・石室とも良好(保存状態良好)。昭和初期の古墳(昭和30年)によると平頭式・ミニチュア調・カマド式ドット・縫合・石室内石室材等が記載。		大阪府教育委員会、 石室蓋及び堆積土 花田勝広兵	1B区
郡17 140号墳		郡11	郡川5号墳	262号墳		元堆積木塁。埴生・石室とも良好。天井石は削平して倒れて倒れる。		花田勝広兵石室宝塚	1B区
郡18 141号墳	165号墳	郡13	郡川4号墳	283号墳		埴生。埴生は土井兵衛の石室調査後である。天井石は天井石と見られる。		花田勝広兵石室宝塚	1B区
郡19 142号墳	159号墳	郡12	郡川3号墳	259号墳		埴生。埴生・石室とも良好。埴生は埴生土より削り出。東側斜面の埴生は不確実。		花田勝広兵石室宝塚	1B区
郡20 143号墳	148号墳	郡7	郡川21号墳	253号墳?		山林状(もと植林地か)。石室に間に狭いやや高まりのある剥落部。剥落部に石室蓋とみられるが露出し、石室よりわずかに内部の見えた穴跡。			1B区
郡21 144号墳						山林。山の最高点付近。宝室と玄室と奥邊右側壁の一部が露出。堆積物の一部が奥邊右側壁の間に途切られている。古墳盛土を利用し、更に土を盛って堆体とした。			1A区
郡22 145号墳	154号墳	郡1	154号墳			山林状。天井石共2石の石室蓋が残かれ。天井の大半が剥落して倒れ、堆積部に大きめがあり、穴が開いていて危険な状況。後述天井石が石室けりで倒れて陷入される。天井石は天井に直接倒れる。		花田勝広兵石室宝塚	1B区
郡23 147号墳	146号墳			220号墳?		山林状。天井石と側壁をかぶる石の一部が露出。墳丘は北半分で崖面をなし直角され、削落とせず。			1B区
郡24 148号墳	149号墳		郡川17号墳			山林状。宝室を側壁が石室として利用されて推定。石室石材を取り戻し側壁の埴生の一部が残存。		花田勝広兵石室宝塚	1B区

番号	古墳名	墳丘			石室									開口方向	保存状況		
		形状	法量(単位:m)		形式	法量(現存部での法量・単位:m)											
			墳丘径 (現存径)	墳丘高 (現存高)		石室長	長	幅	高	奥	幅	高					
都25		円墳	12.6	1.5	不明	3.7	3.7	1.6	1.6	不明		S-50°-W	やや良好				
都26		円墳	9.8	4 (西側)	不明	5.1m以上	不明								S-30°-W やや良好		
都27		円墳	16.5	4.8			不明								良好		
都28						不明									消失		
都29		円墳	17.7	3.7 (西側) 2 (東側)	右片袖	5.8	4	2.7	3.2	1.8	1.5	1.9	S-50°-W	非常に良好			
都30 納鉢塚		円墳	16.2	5前後	両袖	5以上	3.2	2.8	2.8	2以上	1.4	1.4	S-80°-W	良好			
都31		円墳	15.6	4.8			不明								N-70°-W 付近か 良好		
都32		円墳	17.6	4.6	両袖	6.4	3.6	2.2	2.3	2.8	1.5	1.5	S-80°-W	良好			
都33		円墳	9.8	1	不明	7前後 (推定)	不明								N-60°-W 付近か やや良好		
都34		円墳	12.1	1.5	左片袖か	4.8	4	1.6	1.2	0.8か	1か	0.5か	S-80°-W	半壊			
都35		円墳	15.2	3.8	右片袖	6	4	1.7	2.2	2.2	1.1	0.8	N-70°-W	良好			
都36		円墳	14.6	4.8	右片袖	7.6	4	2	2.2	3.6	1.4	1.4	S-30°-W	やや良好			
都37		円墳	12.7	3.3以上			不明			7位か	不明		N-30°-W 付近か	良好			
都38		円墳	8.9	1			不明								N-20°-W 付近か 良好		
都39		円墳	13.3	1			不明								S-50°-W か 良好		
都40		円墳	14.7	4.2			不明								良好		
都41		円墳	12.1	3.5			不明								良好		
都42		円墳	16	1.6			不明								N-40°-W 付近か 良好		
黒7		円墳	9.5	1.7	右片袖か	3.9以上	不明								S-40°-W 半壊		
黒8		円墳	14~15 (推定) 8 (現)	1.5	右片袖か	7.3	4.8	1.85	1.5	2.5	不明	1	S-60°-W	半壊			

凡 例

*番号は平成19年度に八尾市教育委員会文化財課が郡川地区で行った詳細分布調査で、新たに付した古墳番号である。番号の横で「都○」としているのは、「郡川○号墳」の略、「東○」としているのは、「東吉○号墳」の略である。

*石室の計測値については、一部を除いては、野洲市教育委員会の花田勝広氏の石室実測値を使用させていただいた。

*保存状態の欄については、下記の基準で示している。

非常に良好 墳丘・石室ともにほとんど削平・崩落等がないもの、良好な保存状態である。

良好 墳丘・石室の一部にともに削平・崩落等があるものの、全体に良好な保存状態である。

やや良好 石室は比較的良好に遺存しているが、墳丘の盛土が洗出し、石室が露出している。

半壊 墳丘・石室が、1/2以上は壊れている。

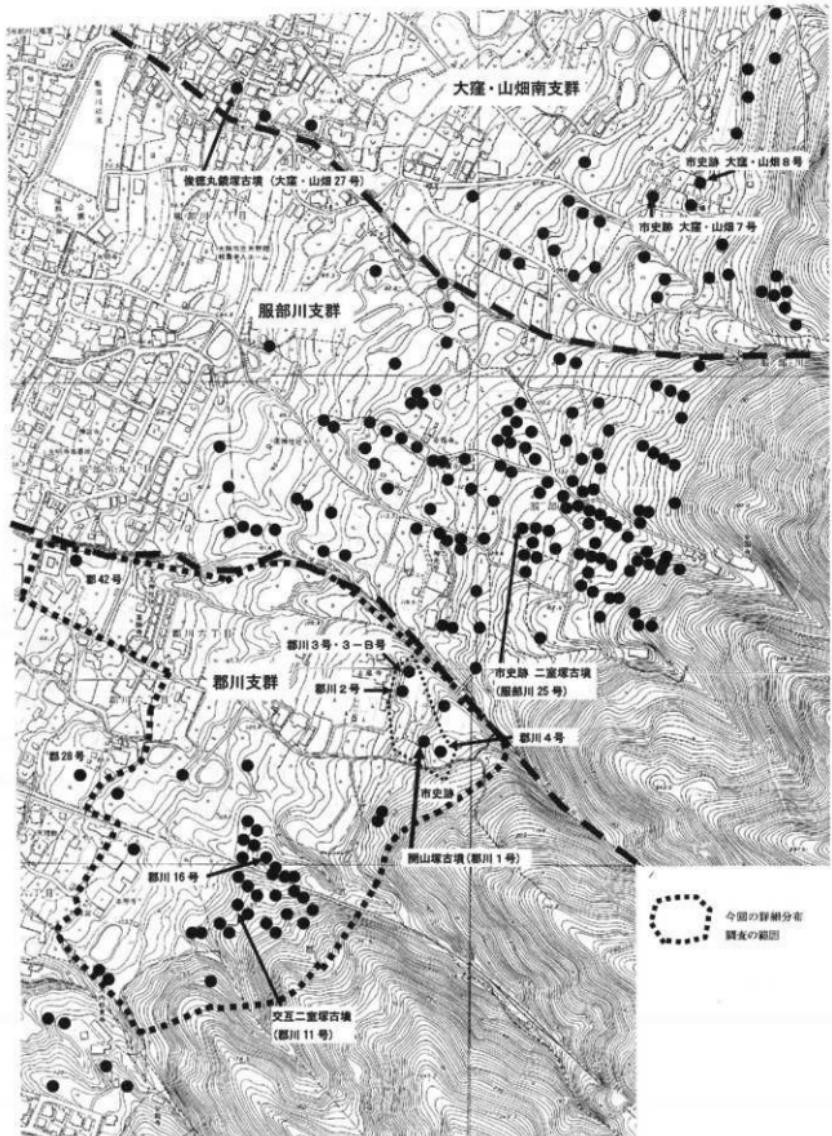
全壊 墳丘・石室が、地表面には全く遺存していない(調査後、埋没保存されたものは除く)。

*石室の形式の欄の「右片袖」「左片袖」は、玄室内から族道方向を見た袖の位置で示している。

番号	市文化財登録目録 登録 (平成5~6年)	既往調査の古墳番号				古墳の現状・特記事項他	文献番号	既往の測量・ 実測等調査 図3での 古墳の位置
		市古文化財台帳 (元治三~五)(昭和1926~20年)	高安城を跨る谷 (昭和61~平成 2年)	大阪府教育委員会 (昭和41~43年)	中田耕農業者会 (昭和46~47年)			
都25	149号塚	145号塚	都6	都川18号塚	25号塚?	山林。後掛する原谷と塚丘が異なっている。石室は小 型?と被認定される可能性もある。石室は天井石・奥壁 の石の一基が消失している。	花田勝広氏石室実測	1B区
都26	150号塚			都川19号塚	26号塚?			1B区
都27						山林。もと植林地か。地形を利用して塚丘が造られ、 北面に土塁が設けられており、南東面は墓位庭がない。塚丘 北側斜面に石垣が立ち込める。		1B区
都28						跡地を歩く中で多くの石室セメントの石室記念碑残存 点。合わせて植林地、御遺跡跡地出土。	(9)	八尾市教委 平成8 年度発掘調査 図2
都29	144号塚	都5	都川20号塚?			山林状(もと植林地)。石室の複数箇所が埋没して いるとともにものぼりの石室。塚丘と共に自然に保存。 玄室内で遺物搬入が見られる。	花田勝広氏石室実測	1A区
都30	155号塚	155号塚	都2	155号塚	273号塚	本塚周内、幼稚園として記されている。宝刀形の 持手など甚多。石室は天井石・奥壁・奥壁の下段の 支樋?として記述されている。奥壁前面に石室が足 され、蓋石と並び残されている。	花田勝広氏石室実測	1B区
都31		161号塚			271号塚	山林状(もと植林地)。施設の跡と推測される斜面に平野。 石室は塚丘内に落成しているのみならず一部石材も出土。 周辺地帯のもの不明だが、東洋後縫合の馬鹿の巣にカット された埴輪あり。		1B区
都32	164号塚	都19	都川8号塚	285号塚		植木地。埴丘・石室共には見えず、埴丘南端は石室等作 られている。植道や樹木の疎ら。左の塚の脇に「前後 堤防」はまさに見られる。	花田勝広氏石室実測	1B区
都33		都14	都川4号塚	259号塚		山林状(もと植林地)。若1号に隣接。埴丘は漆部 と茶色土色され、若1号の頂に突出しない。石室開 口方向は若1号と平行である。石室一部開口あるが、 埴丘寄り。		1B区
都34						山林状(もと植林地)。埴丘上半~西側にかけて削平 を受け、石室は現在3段位に左側に倒壊。最上の下段の み保存。施設の文字で玄室の外側を記す。		1B区
都35	140号塚	都3				山林。直線後背傍地をカットし造成。北側の石室良好。 石室上部露出し。左側側土圧かけられ、天井石落着しかか る。復縫合の跡があるが、立派の施設で、立派の施設で西に 開口する。	花田勝広氏石室実測	1B区
都36			都川11号塚	267号塚		山林。池の北側の堤として利用されている。石室天井 石は奥壁が壁の室内に転落し、側壁の石が倒れて いる。玄室の土圧側に小妻窓探査。	花田勝広氏石室実測	1B区
都37					268号塚	山林(竹林)。池の北側の堤として利用されている。 2基近くして造成されている。天井石上面の石が一部見 えますが露出していない。		1B区
都38		都24				山林。西面は井手の一部とみられる石材が露 出。埴丘は削平としない。		1B区
都39						山林。(もと植林地)。埴丘と石室石材とみられる石 の石がみられる。		1B区
都40						山林。埴地をカットして埴丘を造っている。埴丘北西 側に南北の一部と削平あり。		2B区
都41						山林。埴地をカットして埴丘を造る。埴丘から埴地の 一部に削平あり。		2B区
都42						堤地・山林状(もと植林地)。埴地を用いて堤地 としたものとらぬ。堤地内に隣接した石室がある 石室群。埴丘は石室と埴地を中心削平され、平地 となっている。		図2
黒7						山林。石室石材の抜き取り露地とみられる跡があり。 埴丘と石室石材の石室の一部の存在。		1B区
黒8						堤地。左側は石室として利用され、右側は石室1 石室群。埴丘は石室と埴地を中心削平され、平地 となっている。		1B区

文献番号

- (1) 八尾市教育委員会2005年 「高安古墳群測量・実測調査報告書―法藏寺境内 市史跡 間山塚古墳―」
- (2) 八尾市教育委員会1984年 「八尾市内地跡昭和58年度発掘調査報告書」
- (3) 八尾市教育委員会2008年 「高安古墳群分布・測量調査報告書 賀部川地区詳細分布調査 都川4号塚測量・実測調査 他」
- (4) 秋里豊島・丹羽桃溪1801年 「河内名所圖会」
- (5) 津波清三1999年 「八尾の古文化財その1 古墳」 八尾市
- (6) 西森忠幸2003年 「横穴式石室の増改築について~円内の二重室互座古墳をめぐって~」『古代学研究』第162号
- (7) 大阪府教育委員会1968年 「八尾市高安古墳群の調査 昭和41年度第1次巡回[其他地区調査概要]」「大阪府古文化財調査概要1965・1966年度」
- (8) 田中都1986年 「都川11号塚」『韓式古器研究1』
- (9) 八尾市教育委員会1997年 「八尾市内地跡平成8年度発掘調査報告書I」
- (10) E・S・モース1880年 「Dolmens in Japan」(翻訳: 佐野勝弥・田中一廣1991年 「日本におけるドルメン」『花園史学』第12号)
- (11) 矢田部良吉1879年 「河内国高安郡の石室」『人力社四半年報』第1号
- (12) 山崎信二1985年 「横穴式石室構造の地域別比較研究 中・四国編」



第2図 高安古墳群集中地区 古墳分布図 (1/5,000)



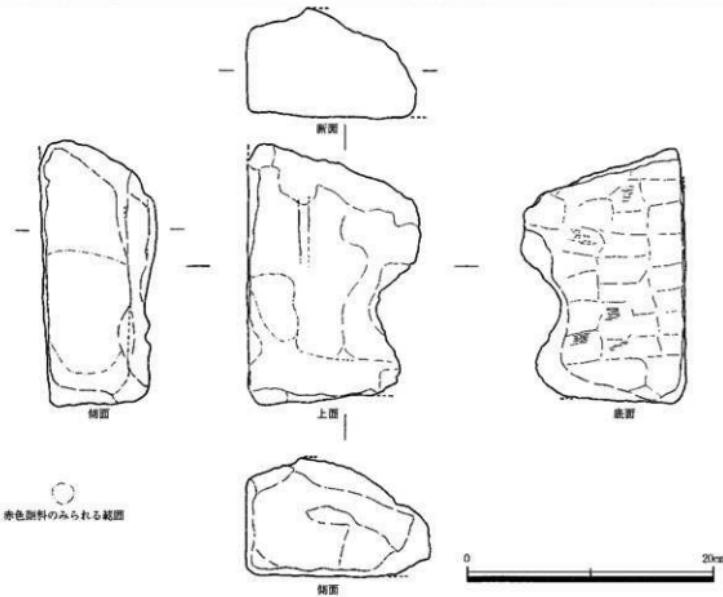
第3図 高安古墳群 郡川地区古墳・古墳状地点分布図 (1/2,000) (※地区割線は表2での「図3での位置」の欄に対応する。)

3. 郡川17号墳玄室内採集の石棺材

今回の詳細分布調査で、郡川17号墳の玄室内において、石棺材片を表面採集した。本墳は郡川南支群の南東側、標高130~135mの尾根上に立地する。この付近は、郡川南支群でも最も古墳が集中する地域であり、本墳と同一尾根上に古墳が連なり、東側には、郡川18号墳が、西側には、郡川8号墳が立地する。本墳は、現存の直径13.6m、高さ4.7mを測る円墳であり、墳丘の一部にやや削平を受けているものの、全体に良好に遺存している。墳丘は尾根の地形を利用し、西側を高く見せるように造られており、東側の山側は、ほとんど高低差がない。石室は右片袖式で、現存長は7.8mを測り、開口方向は、ほぼ西方向（S~80°~W）である。玄室の平面プランは長方形で、玄室の石積みは4段から5段で積まれ、袖石は4石よりなる。石室石材は、特に狭道部に長軸径0.5m前後のやや小振りな石材を積んでいるが、袖部付近の左側壁には、長軸径1mの継長の石材を使用している。

石棺材は、玄室中央の奥壁寄りで採集した。組合式家形石棺の底石となる部材である。石材種は、二上山産系凝灰岩とみられる。上面は風化が著しいが、外周をJ字状に幅5cm、深さ1cm弱程低くして段差を付けており、側石と小口石をはめ込むための造作とみられる。工具痕は認められなかったが、一部に赤色顔料が遺存していた。底面は、幅1.5~3cm前後の工具痕がみられるが、赤色顔料は認められなかつた。高安古墳群集中地域では、組合式家形石棺が多く使用されているようであり、分布調査では、服部川支群で20例程度、大窪・山畑南支群で11例を確認している。郡川支群では、分布調査で郡川北支群の郡川1号墳（開山塚古墳）においてと、発掘調査で郡川2号墳において確認している。また、郡川1号墳をはじめとする古墳が所在する法藏寺境内においても、確認している。郡川南支群では、郡川17号墳出土例が、初例であり、郡川支群では4例目となる。

部位	法量（単位：cm）			石材種	調整等
	最大残存長	最大残存幅	最大残存厚		
底石	21.8	14	9.5	二上山産系白色凝灰岩	上面は外周を低くし、段差を付ける。工具痕は認められない。一部に赤色顔料検出。底面は、幅1.5~3cmの工具痕がみられる。赤色顔料は認められない。



第4図 郡川17号墳 表面採集石棺材実測図（1/4）

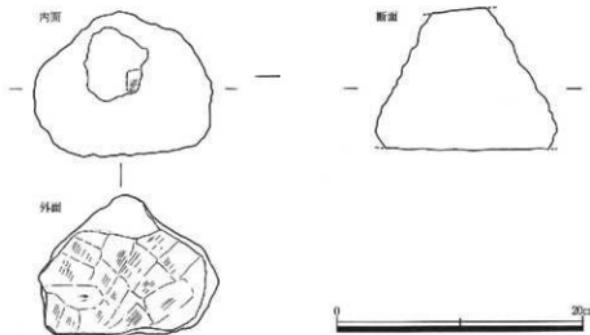
〈付載 1〉 服部川80号墳表面採集の石棺材

今回報告するのは、高安古墳群集中地域服部川支群の詳細分布調査において、平成15年度に服部川80号墳の玄室内南西側で表面採集した石棺材1点である。本年度の詳細分布調査においても石棺材を表面採集し、本資料についても実測を行ったので、報告しておく。本墳は服部川支群の北西側、標高150～160mの緩斜面上に立地する。付近には古墳状地点が2箇所みられ、東側50mの位置には、服部川81号墳・同82号墳・同83号墳・同98号墳が一定のまとまりをもって立地している。本墳は、現存の直径17.6m、高さ3.9m測る円墳であり、墳丘の北東側は一部削平を受けているものの、全体に墳丘の形状が良好に遺存している。石室は右片袖式で、現存長は6.2mを測り、開口方向は、ほぼ真南である。玄室の平面プランは長方形で、玄室の石積みは4段から5段で積まれ、袖石は3石よりなるが、下段と上段に小振りの石材を使用し、中段に径1mの大きな石材を使用している。また、袖部の左側壁には、長軸径2m、短軸径1.4mの巨石1石で、壁面を構成している。6世紀後半の石室である。

玄室の南西側袖部付近には、石棺材片が散乱しており、そのうちの1点を資料として表面採集した。本資料は、内面と外面とした二面が遺存する小片であり、部位は判然としない。石材種は、二上山産系凝灰岩とみられる。外面とした面には、幅1.5～2.5cmの工具痕が遺存している。内面とした面は、残存部が狭小だが、比較的平滑で一部に工具痕がみられた。高安古墳群集中地域では、二上山産系凝灰岩製の組合式家形石棺が多く使用されているようであり、服部川支群においては、分布調査で19例程度、発掘調査で1例の石棺材が確認されている。本墳は右片袖式石室で玄室床面積が、7.1m²を測り、高安古墳群集中地域では、最も多くみられる中規模の石室である。本資料は、高安古墳群集中地域での典型的な石室における埋葬棺のありかたを示すものといえる。

1) 八尾市教育委員会2006年「高安古墳群分布・測量調査報告書 - 服部川地区詳細分布調査 部川4号墳測量・実測調査他 -」

部位	法量 (単位: cm)			石材種	調整等
	最大残存長	最大残存幅	最大残存厚		
不明	14.6	11.8	11.8	淡灰白色 二上山産系白色凝灰岩	外面は1.5～2.5cm幅の工具痕あり。内面は比較的平滑で一部に僅かに工具痕あり。



第6図 服部川80号墳 表面採集 石棺材実測図 (1/4)



第5図 服部川80号墳 位置図

〈付載2〉 服部川7号墳の写真撮影（図版26・図版27）

服部川7号墳は、高安古墳群集中地域の服部川支群中央部に所在する古墳である。高安古墳群の片袖式石室では、大窪・山畠7号墳（抜塚）に次いで石室規模の大きい古墳であり、墳丘・石室とともに非常に良好に遺存する古墳である。このことから、平成20年1月16日に本墳の石室内と開口部外観の写真撮影を、阿南写真工房の阿南辰秀氏に委託して行った。事前に石室内の清掃を行ったが、石室内には現代のごみの混じる流入土とともに小礫が全面に落ちており、これについては、すべてを除去できなかったため、そのまま撮影している。この小礫は現代に投入されたものや、石材の崩落した小片等であり、石室の敷石となるものではない。

本墳は標高115~120mの尾根上に立地し、付近には古墳が密集する。現存の直径20.3m、高さ5.6mの円墳である。6世紀後半の築造である。石室の全長は、11.2m、玄室長4.75m、玄室幅2.8m、羨道長6.5mを測る。玄室床面積が 13.3m^2 を計る大型の石室である。玄室の石積みは、4段積みで、袖石は立石1石の上に小振りの石材1石をかませる。羨道は基本的には三段積みだが、袖部の位置の左側壁は、立石状の石材1石で壁面を構成する。このことから、図版27の上の写真にみられるように、奥壁側からみると、左袖の狭い両袖式にも見える石室である。しかしながら、平面プランからみても、右片袖式石室であることは明らかである。このように、右片袖式ではあるが、袖部の位置に立石状の石材を配置し、袖部を強調する石室は、上述した大窪・山畠7号墳（抜塚）、服部川12号墳等にみられる。高安古墳群集中地域では、袖石に立石が用いられる段階の石室において、しばしば見られるものである。

本墳の石室は、大阪府教育委員会により1966年に実測調査が行われた。¹⁾また、古くは、明治12年に米国人の博物学者であり、大森貝塚を発見したエドワード・S・モースが、開山塚古墳をはじめとする9基の高安古墳群の石室を調査しているが、本墳の石室は、そのうちのモースが²⁾石室の羨道から玄室にかけての外観をスケッチしたと推定されている古墳である。³⁾

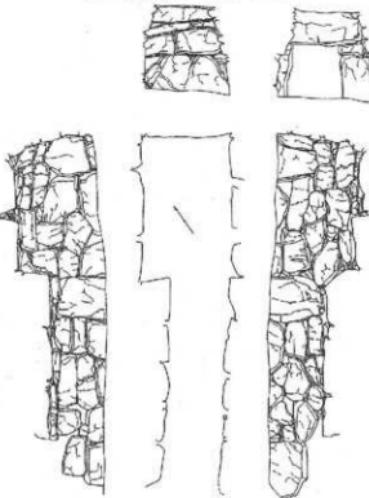
1) 大阪府教育委員会 1970年「高安古墳群実測図」

2) 佐野隆弥・田中一廣記・校註 1991年 エドワード・S・モース1880「日本におけるドルメン」「花

園史学」第12号



第7図 服部川7号墳 位置図



第8図 服部川7号墳 石室実測図

(花田勝広2008「高安古墳の基礎的研究」掲載の大坂府教育委員会1970調査原図を加筆された図を転載)



第9図 E・S・モースによる服部川7号墳

とみられる石室のスケッチ

(E・S・Morse1880「Dolmens in Japan」より転載)

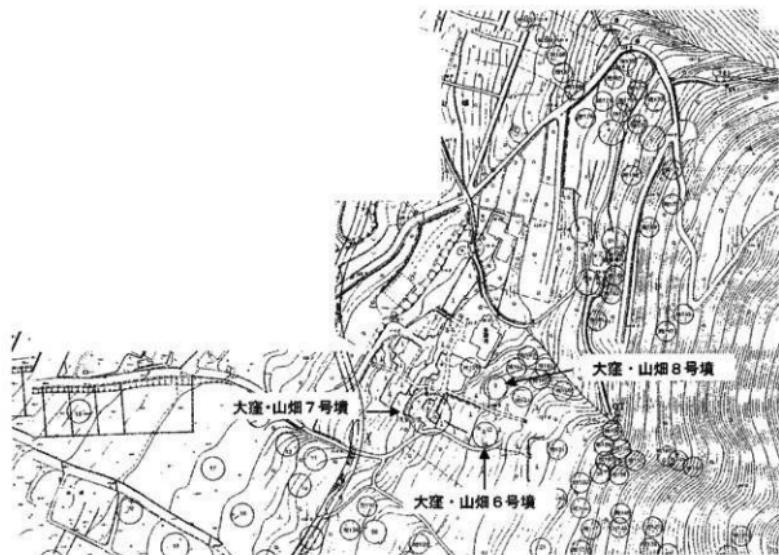
II. 高安古墳群 大窪・山畠6号・7号・8号墳の測量等調査報告

1. 調査の経緯

本年度は、高安古墳群集中地域の大窪・山畠南支群の大窪・山畠6号・7号・8号墳について、墳丘測量と石室の写真撮影を行った。石室実測については、野洲市教育委員会の花田勝広氏が、実測図を作成されており、今回は花田氏の了承をいただいて、氏の実測図を元に一部石室の補足計測を行い、レベル線の記入とトレースを行った。測量については、(株)相互技研に委託し、平成19年9月10日～9月28日の間で電子平板による実地測量を行い、0.2mセンターで、スケール1/100の測量図を作成するとともに、墳丘の横断面図を作成した。また、大窪・山畠7号・8号墳については、平成20年1月15日・16日に阿南写真工房の阿南辰秀氏に委託して写真撮影を行った。

2. 位置と環境

大窪・山畠6号・7号・8号墳は、八尾市の生駒西麓に分布する高安古墳群のなかでも、最も古墳が集中する「高安千塚」と呼ばれる地域の北側の大窪・山畠支群に位置する。標高120～134mの北西方向に延びる尾根上に立地している。現在は淨土宗来迎寺境内の墓地の中に3基が残されているが、大窪・山畠8号墳の西と東には、石室石材かとみられる石の露出する古墳状地點191と同144があり、また、これの北東側の谷筋から上流側に面する尾根上に、古墳の石室石材の抜取り跡かともみられる古墳状地點を多く確認していることから、この付近には、本来、多くの横穴式石室墳が集中していたものと推定される。また、来迎寺境内には、凝灰岩製の石棺材片が置かれている。これについては、今回、所有者の了解をいただいて、写真撮影と略測を行ったので、24頁に付載として報告する。



第10図 大窪・山畠6号・7号・8号墳位置図

3. 大塚・山畠6号墳

[墳丘の立地と現況]

来迎寺境内墓地には、二つの尾根が北西方向に延びているが、このうち南側尾根の標高130～134mの斜面に立地している。墳丘は石室部分を中心に遺存し、他は墓地区画として利用され、段状の平坦面になっている。

[墳丘の形状と法量]

墳丘範囲の推定にあたっては、玄室の奥壁を墳丘の中心点と考えた。また、開口部の先端は、現況の道路により削平されているため、開口部南西付近の標高130.6m付近の等高線が墳丘裾の痕跡を残していると考えた。墳丘中心点と墳丘裾位置を結ぶラインを半径とすると、墳丘は、半径11m前後、直径22mの円墳に推定することができる。この推定復元によると、開口部端と反転方向の北側の墳丘裾の現状の高さは、標高130m前後であり、開口部南西付近の高さ（標高130.6m）とほぼ矛盾しないものとみられる。また、現状の石室の状況から、玄室内流入土を厚さ0.2m程度と考えると、石室の床面は、標高130.5m前後と推定される。石室上に遺存している盛土の最高点の高さは標高134.83mであることから、本来の墳丘の高さは、4.2～4.3m前後と推定される。

墳丘の形状　円墳

墳丘の法量　推定径 22m

推定高 4.3～4.4m前後

[石室の現状]

石室は、玄室天井石の袖石コーナー付近の石材が崩落しかかっており、墳頂部にまで貫通する穴が開いている。また、天井石全体が崩壊しかかっている。さらに側壁は、土圧により左側壁が上方を中心で大きく内傾し、逆に右側壁は持ち送りとは逆方向の外側に、傾いている。また、石材は所々亀裂が入っており、一部に崩落がみられる。このような状況になった要因としては、石室石材が比較的小振りであることに加え、石室周辺の墳丘が削平されたために、右側壁側を支えていた地形の低い齶の西側の墳丘盛土が失われ、山側の左側壁側からの土圧により、右側壁が西側に傾いてしまったことによるものとみられる。天井石も比較的小振りであるため、壁面からの圧力により石材の一部が崩落し、墳頂部の穴から雨水が流入することにより、さらに石材の間の墳丘盛土が流失し、石組みが大変弱くなっているものとみられる。このように、石室の現状は崩壊の危険性が非常に高い状況にある。このため、石室の調査にあたっては、石室内に土嚢を積んで、保護処置を行った。また、石室内に人が入ると大変危険な状況であるため、石室内には立ち入れないようバリケードや土嚢積みの処置を行った。今後、今回の調査資料をもとに、石室の保存処置の方法を、高安古墳群集中地域全体の保存計画のなかで、検討していく予定である。

[石室の形式と法量]

形式　右片袖式

法量　石室長 7.3m

玄室長 4 m

玄室幅 1.7m

玄室現高 2.3m

羨道長 3.3m

羨道幅 1.1m

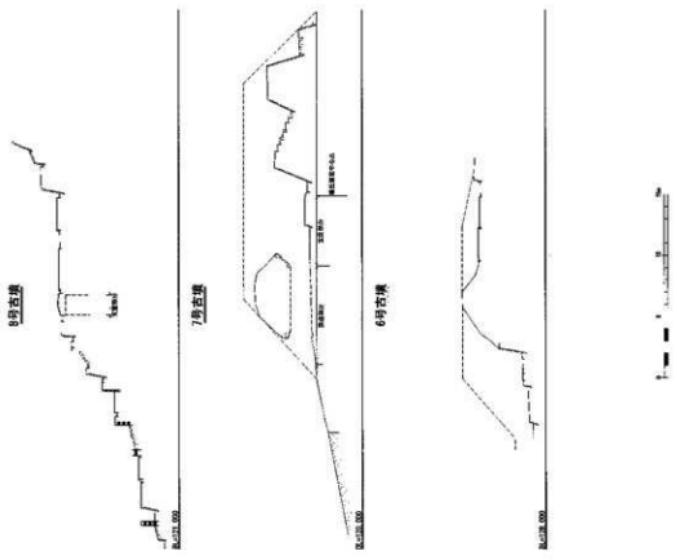
羨道現高 1.4m

開口方向

S - 30° - W



第11図 大塙・山畠6号・7号・8号墳 墳丘測量図 (S=1/400)



第12図 大塙・山畠6号・7号・8号墳 墓丘横断面図 ($S=1/400$)

[石室の特徴と時期]

石室は右片袖式で、玄室の平面形状は、縱長の長方形プランである。石室の石組みは、小振りの石を積む。玄室の側壁は、7～8段積みであり、天井石は5石よりなる。羨道の側壁は、4～5段積みであり、袖石は4石で見上げ石を支えている。羨道の天井石は3石である。本古墳の石室は、花田勝広氏が指摘されているように、平面プランや石組みのありかたが、奈良県高取町に所在する全長66mの前方後円墳である市尾墓山古墳の後円部で確認された石室のありかたに近い。市尾墓山古墳の石室は、MT15～TK10型式期の須恵器が出土している。このことから、本墳の石室の時期は、6世紀前半頃に位置づけられる。

4. 大塚・山畠7号墳

[墳丘の立地と現況]

墓地として利用されてきたため、玄室部分が消失し、羨道部のみトンネル状に遺存していることから、「抜塚」と呼称されている。また、来迎寺境内に所在することから、「来迎寺塚」とも称されている。墳丘は羨道部分付近に遺存している。また、消失した玄室を囲むように、北と東に墳丘の残存地形がみられる。

[墳丘の形状と法量]

墳丘範囲は、消失した玄室の北東に残存する墳丘から推定される奥壁推定位置を中心点とし、羨道部前面の谷状地形から推定される開口部端の間を結ぶラインを半径とする、半径15m、直径30mの大規模な円墳に推定復元される。また、開口部端の標高は、123.7mを測るが、直径30mとして推定復元すると、開口部端と反転方向にあたる墳丘北東端の現況の標高は、124mであり、開口部端の標高(123.7m)とほぼ矛盾しないものとみられる。また、開口部端推定位置から、現存している羨道付近の墳丘盛土の最高点を結ぶ推定墳丘斜面のラインは、現存の墳丘南西斜面の傾斜ともほぼ一致する。また、床面推定高は、羨道の現状から、流入土が厚さ0.5m前後と考えると、標高123.7m付近となる。また、見上石の最高点の高さは、標高127.3mであり、この上にさらに玄室の厚さ1.5m前後の玄室天井石と厚さ1m近い盛土が覆っていたと考えると、墳頂部の最大推定高は標高129.8m前後となり、墳丘推定高は、6m前後と考えられる。

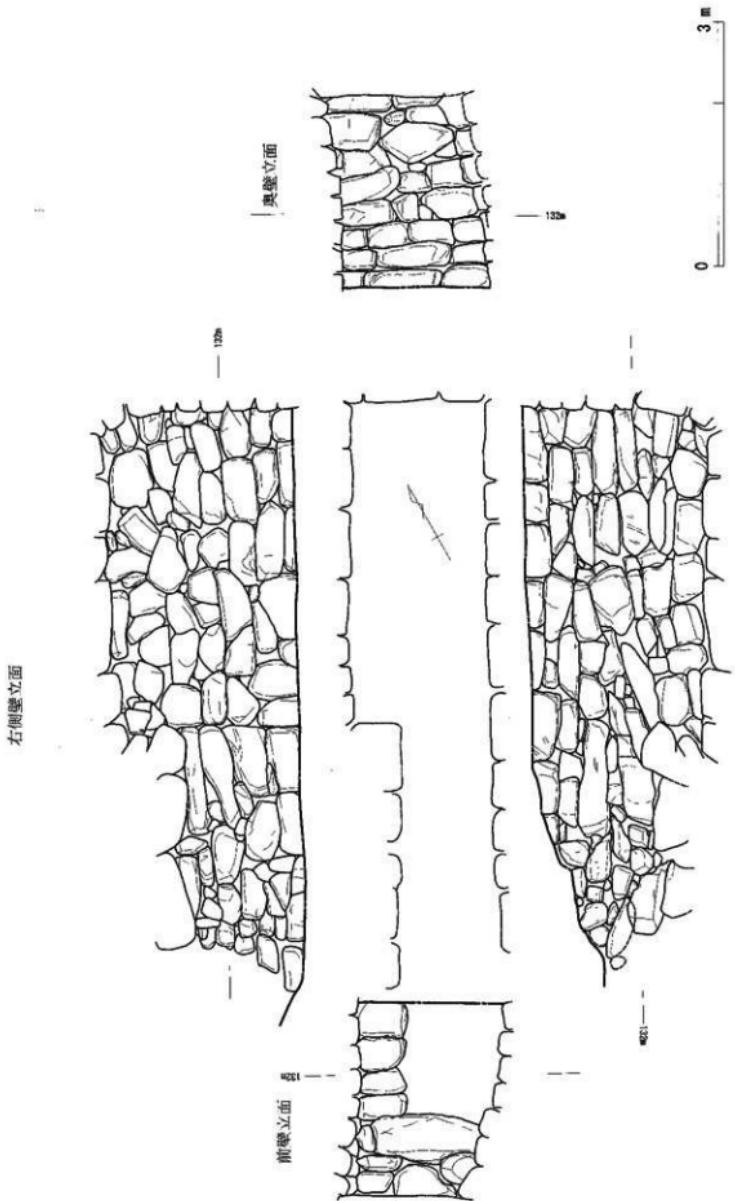
形状	円墳
法量	推定径 30m前後
	推定高 6 m前後

[石室の形式と法量]

石室の形式については、既に先学により指摘されているように、羨道の右側壁には、袖石が遺存しているが、左側壁は直線的に玄室側へ一分石延びていることから、右片袖式の石室であると判断される。また、花田勝広氏が実測図に推定ラインを示されたとおり、袖石の西端と一石のみ遺存している玄室左側壁の石から、玄室の幅は3mと推定され、右側壁の袖石から北東側の墳丘残存地形までの距離から、玄室の最大推定長は6mとなる。このことから、玄室推定長は、5～6mの巨大な玄室であった可能性がある。現存の羨道長は8mであることから、石室全体の推定長は13～14mとなる。以上から、玄室床面積は15m²以上となる巨大な石室であったと推定される。

形式	右片袖式
法量	羨道現存長 8 m
	羨道幅 24m
	羨道現存高 22m
玄室長（推定）	5～6 m前後
玄室幅（推定）	3 m前後
石室長（推定）	13～14m
開口方向	S -55° - W

大窟・山烟6号墳石室実測図



第13図 大窟・山烟6号墳石室実測図 ($S=1/60$)

[石室の特徴と時期]

玄室は長方形の平面プランと推定され、羨道幅指數80（羨道幅+玄室幅×100）となる。また、羨道長が、推定玄室長を上回るものである。

石組みの方法は、袖石の立石1石で、見上げ石を支えるものである。羨道側壁は、基本的には2段積みであるが、袖部の位置の左側壁の石は、右側壁の袖石と同様に、1石で壁面を構成する。羨道の天井石は3石を架構する。巨大な石材が使用されており、見上げ石の長軸径は3m前後を測る。

石室の平面プランや石組みのありかたから、7世紀前半頃の築造とみられる。

5. 大窟・山畠8号墳

[墳丘の立地と現況]

本墳は、来迎寺墓地境内に北西方向に延びる二つの尾根のうち、北側尾根の標高126~132m付近に立地している。墳丘部はすべて墓地区画として利用されており、墳丘の東西方向の断面に、かろうじて墳丘西側斜面の形状の名残りがみられる。石室については、玄室の左側壁が、土圧によりやせり出しており、羨道も南端は消失しているとみられるものの、概して良好に遺存している。墳頂部上面の墓地には、玄室部分の天井石の2石の一部が露出している。

[墳丘の形状と法量]

玄室の奥壁を墳丘の中心点と推定し、開口部の先端を羨道南側延長上の石垣の傾斜変換点付近と推定した。墳丘中心点と開口部先端を結ぶラインを半径とすると、半径10.2m前後、直径20.4mの円墳に推定することができる。また、玄室の現状から、流入土は厚さ0.2m前後であると考えると、石室の床面は標高127.8m前後と推定される。玄室天井石露出部分の高さが、標高130.99mであり、本来はこの上に墳丘盛土が覆っていたと考えられることから、本来の墳丘の高さは、3.5~4mと推定される。

形状 円墳

法量 (推定) 径20.4m

(推定) 高3.5~4m前後

[石室の形式と法量]

石室は右片袖式である。羨道現存長は1.95mを測るが、現存の羨道の南側には、後世の石垣が作られており、大窟・山畠6号墳の羨道長から考えても、本来は更に長く3.5m前後であった可能性がある。

形式 右片袖式

法量 石室現存長 6.75m

玄室長 4.4m

玄室現存高 2.2m

玄室幅 1.65m

羨道現存高 1.2m

羨道現存長 1.95m

羨道幅 1.2m

開口方向 S-50° -W

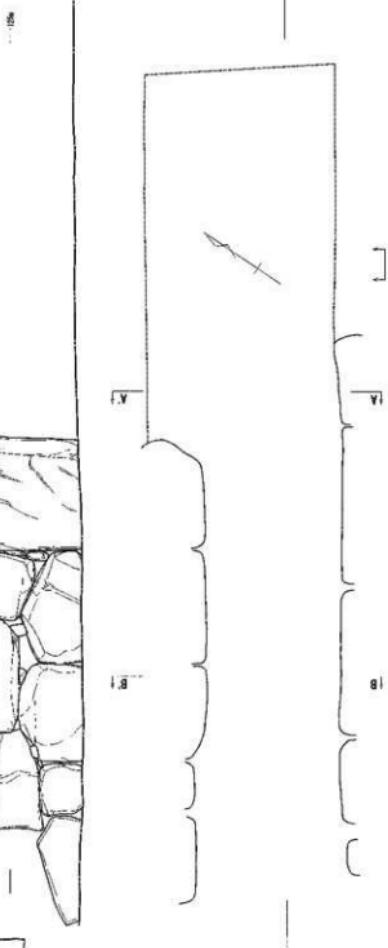
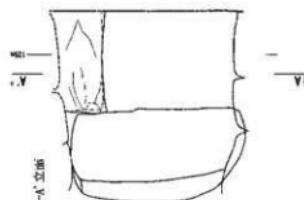
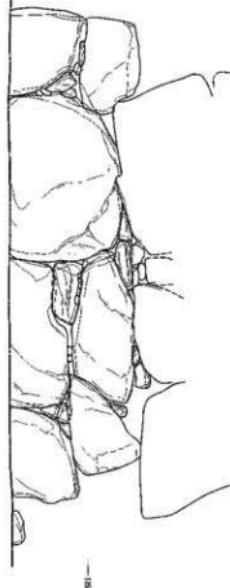
[石室の特徴と時期等]

玄室の平面形状は、縦長の長方形プランである。比較的小振りの石を積むことを特徴とする。玄室の側壁は、5~6段積みであり、天井石は4石となる。羨道の側壁は、2~4段積みであり、袖石は2石で見上げ石を支えている。羨道の天井石は1石であるが、羨道の本来の長さが、さらに長かったとすれば、天井石が2石であった可能性がある。また玄室内から、二上山産凝灰岩製の石棺材の小片3点を表面採集した。

本墳の石室は、大窟・山畠6号墳の石室と同様に、玄室が縦長の長方形プランである。石組みのありかたは、大窟・山畠6号墳が玄室は7~8段積みであり、羨道は4~5段積みであるのに対し、本墳は、玄室は5~6段積みで、羨道は2~4段積みである。また、袖石は、大窟・山畠6号墳は袖石が4石であるのに対し、本墳の袖石は2石である。このことから、本墳の石室は、大窟・山畠6号墳石室の直後

右側壁立面

大塚・山烟7号墳石室実測図



右側壁立面

第14図 大塚・山烟7号墳石室実測図 (S = 1/80)

の段階の築造であるとみられ、6世紀中葉頃の時期と考えられる。

6.まとめ

大窪・山畠6号墳は、奈良県高取町の市尾墓山古墳の石室タイプに類似する古式の石室であり、大窪・山畠8号墳も同様のタイプで、6号墳の直後段階の石室である。森下浩行氏は畿内型石室の系譜を検討され、畿内型石室を縦長の玄室平面プランで平天井のA類と、方形に近い平面プランでドーム状天井を有するB類に分けられている¹⁾。市尾墓山古墳の石室は、畿内型石室A類の片袖式のタイプの初現を示す代表例とされているものである。高安古墳群集中地域には、花田勝広氏が指摘されているように、森下氏の畿内型B類の古いタイプである郡川16号墳や、これに続く段階の石室である大窪・山畠22号墳等のドーム状天井を有する古式の石室が數基確認されている。

のことから、大窪・山畠6号墳・8号墳は高安古墳群集中地域（高安千塚）の石室の二つの系譜のうちの一つである畿内型石室A類の初現期の様相を示す古式の石室であり、古墳群の造墓集団の系譜を考える上でも重要である。

大窪・山畠7号墳は、本来の玄室の大きさは、長さ5～6m、幅3m前後で、石室長が13～14mとなる大型の石室であったと考えられる。現在、高安古墳群中で最大の石室は、郡川に所在する開山塚古墳（郡川1号墳）であり、石室全長13.05m、玄室長4.67m、玄室幅3.37mを測る。玄室の床面積では、開山塚古墳は、15.7m²を測るが、大窪・山畠7号墳は推定で約15m²以上となり、高安古墳群中で最大級の玄室をもつ石室の一つであったと考えられる。また、本墳は石室の石材も巨石が使用されており、八尾市神立に所在する独立墳で、大阪府下最大の横穴式石室墳である愛宕塚古墳の石室の石組みとも類似する。

のことから、高安古墳群の中でも最有力層の墓の一つとして重要である。また、現況は羨道しか遺存していないものの、羨道の大きさや石材の巨大さから、本来の石室の規模を実感することができるものとして貴重である。

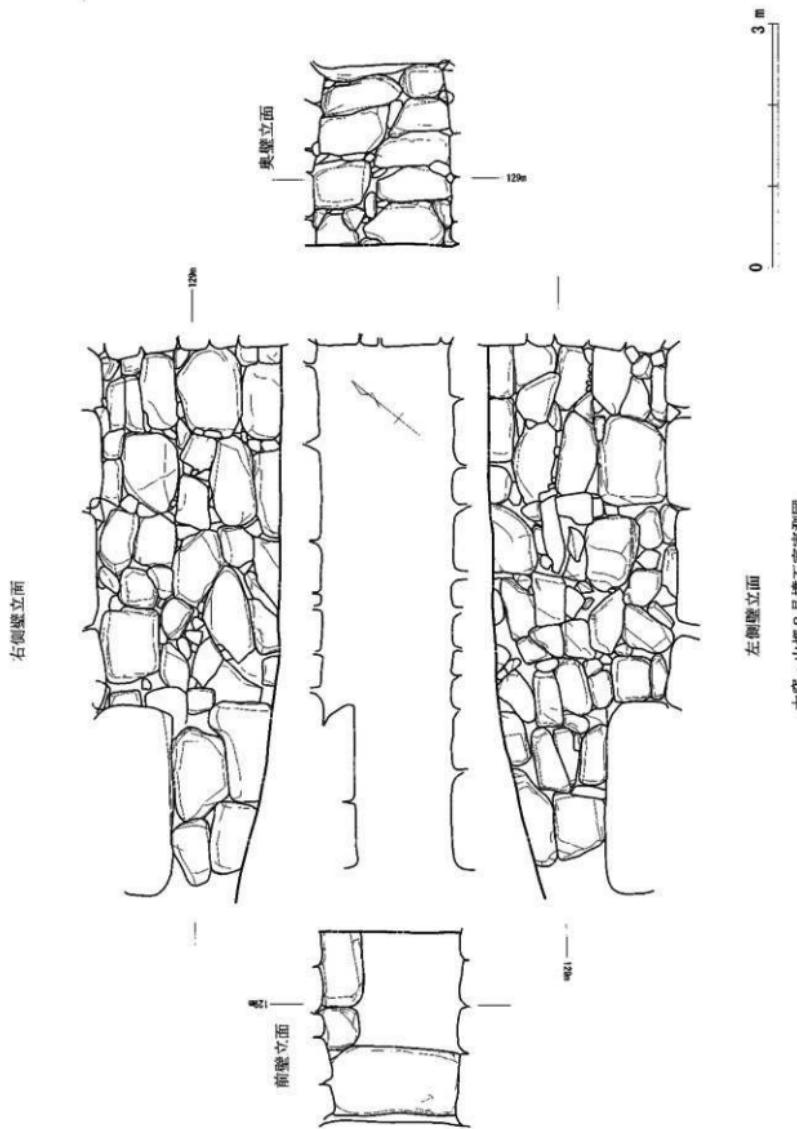
1) 萩洲市教育委員会 花田勝広氏のご教示による。

2) 高取町教育委員会2007年『国指定史跡 市尾墓山古墳整備事業報告書』

3) 大窪・山畠7号墳が右片袖式の石室であることについては、考古文化研究会の西森忠幸氏のご教示によるものである。

4) 森下浩行1986年「日本における横穴式石室の出現とその系譜—畿内型と九州型—」『古代学研究』111号

5) 花田勝広2008「高安千塚の基礎的研究」『八尾市文化財紀要13』八尾市教育委員会



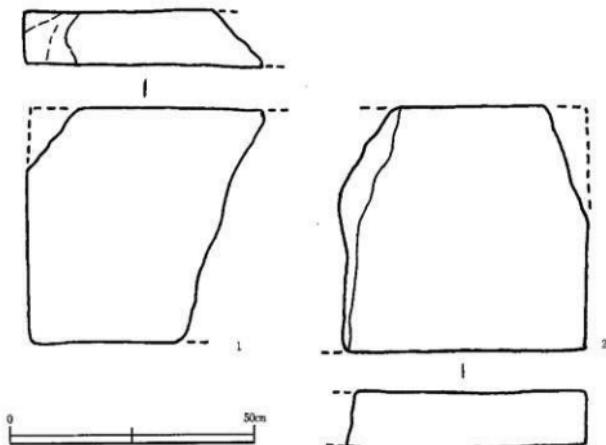
第15図 大壁・山烟8号墳石室実測図 ($S = 1/60$)

〈付載〉 来迎寺境内の石棺材（図版28）

来迎寺本堂の南側の庭には、二上山産凝灰岩製の石棺材片2点が置かれている。これについては、出土古墳は不明であるが、付近の石室からの出土したものであるとみられ、今回、所有者の了解をいただいて、写真撮影と略測を行った。また、石棺材片は長年の風雨により風化し、劣化が著しくなっていたため、所有者の了解を得て、本堂の軒下に移動した。石棺材は2点あるが、図15に配図したように、1と2の石棺片は接合できるものである。本来は、長辺80cm、短辺47cm、厚さ11cmの長方形の部材であり、組合式家形石棺の底石の一つであったとみられる。全体に風化が著しく、側石や小口石を嵌め込む溝や、工具痕、赤色顔料などは確認できなかった。観察した面とは反対側に存在した可能性もあるが、大変脆くなっているため、反転して観察することはできなかった。

この部材は、高安古墳群周辺地域の芝塚古墳（神立7号墳）の石室に3棺納められた組合式家形石棺のうちの一つ（石棺Ⅲ）の底石の大きさに近い。芝塚古墳は、6世紀後半の両袖式石室で、玄室内に三つの石棺が原位置で確認されている。¹⁾芝塚古墳の石棺は長軸を石室主軸に揃えて置かれており、玄室奥の石棺Ⅰは、兵庫県の流紋岩質凝灰岩質砂岩製で、手前の石棺Ⅱ・Ⅲは二上山産凝灰岩製である。来迎寺境内では、今回の調査において、大塙・山畑8号墳の玄室内で、二上山産凝灰岩製の石棺材片の小片3点を確認している。大塙・山畑南支群では、本資料を含めて12例の石棺材を確認している。ほとんどが組合式家形石棺材片とみられるものであるが、大塙・山畑5号墳（来迎寺北古墳）は、削黄式家形石棺である。高安古墳群集中地域においては、服部川支群で20例程度、郡川支群で4例の石棺片を分布調査等で確認しているが、いずれも組合式家形石棺の部材とみられるものであり、二上山産凝灰岩製の石材がほとんどを占める。本資料については、大塙・山畑8号墳からの出土であるかは不明であるが、高安古墳群で最も多く出土する二上山産凝灰岩製組合式家形石棺材片であり、来迎寺境内のいずれかの石室に納められていたものとみられる。

1) (財)八尾市文化財調査研究会1993「高安古墳群 芝塚古墳」



第16図 来迎寺境内石棺材略測図（1/100）

Ⅱ 高安古墳群黒谷10号墳の調査

1. 調査概要

1) 調査の方法と経過

調査地は、八尾市黒谷地区の東方にある河内妙見寺から南西へ約400mの地点に位置する。黒谷10号墳の墳丘は、削平されていたものの、石室の形状がわかる石列が残存し、石室内から鉄釘が数本出土している。このため石室部分を中心に調査を行うとともに、墳丘盛土の残存状況を確認するため、東と南にトレンチを設定し調査を行った。

2) 検出遺構と出土遺物

石室は、石材の一部が玄室内に転落していたもの以外、天井石をはじめ上部のほとんどが取り除かれていた。石室は1段目の石列がほぼ残存、東壁には2段目の石1個が唯一残存している。玄室内に壁石と思われる2個の石があった。また北部および西部は近年の開発で削平され、1段目の上部は1m前後の現在の盛り土があった。北部が奥壁、西部が西側壁を石材であることが確認された。さらに、羨道・天井石および西側壁上部の壁石は抜き取られていた。

① 石室内部の状況

石室は右片袖式の横穴式石室である。羨道は南に開口している。主軸はほぼ南北方向である。石室内には土砂が全体に堆積していた。これらの土砂は約0.1~0.3mの厚みがあった。掘り下げたところ、硬くしまった床面を検出した。標高は約56mを測る。床面は扇状地の地山を削って造られており、羨道と玄室に15cm前後の段差がみられた。玄室の床面が低くなった構造であった。

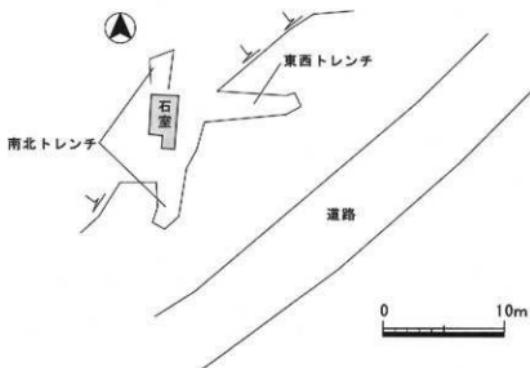


第17図 調査地周辺図及び位置図 (S=1/5000)

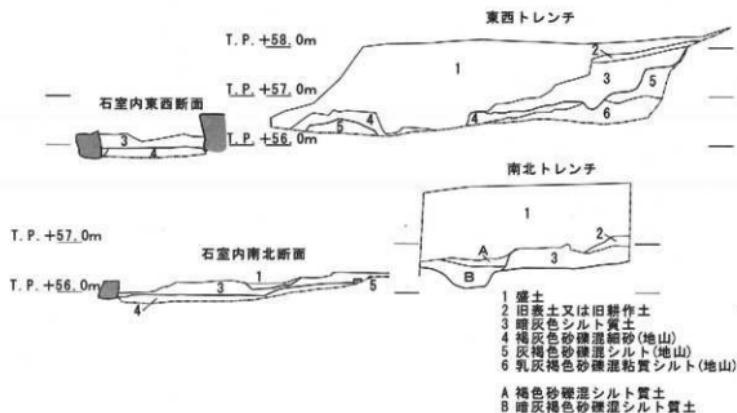
② 石室の規模と木棺

石室は全長6m以上を測る。各部の数値は、玄室長3.1m・奥壁幅2.2m・玄門幅0.9m・羨道長1.1m以上・羨道幅0.9mである。

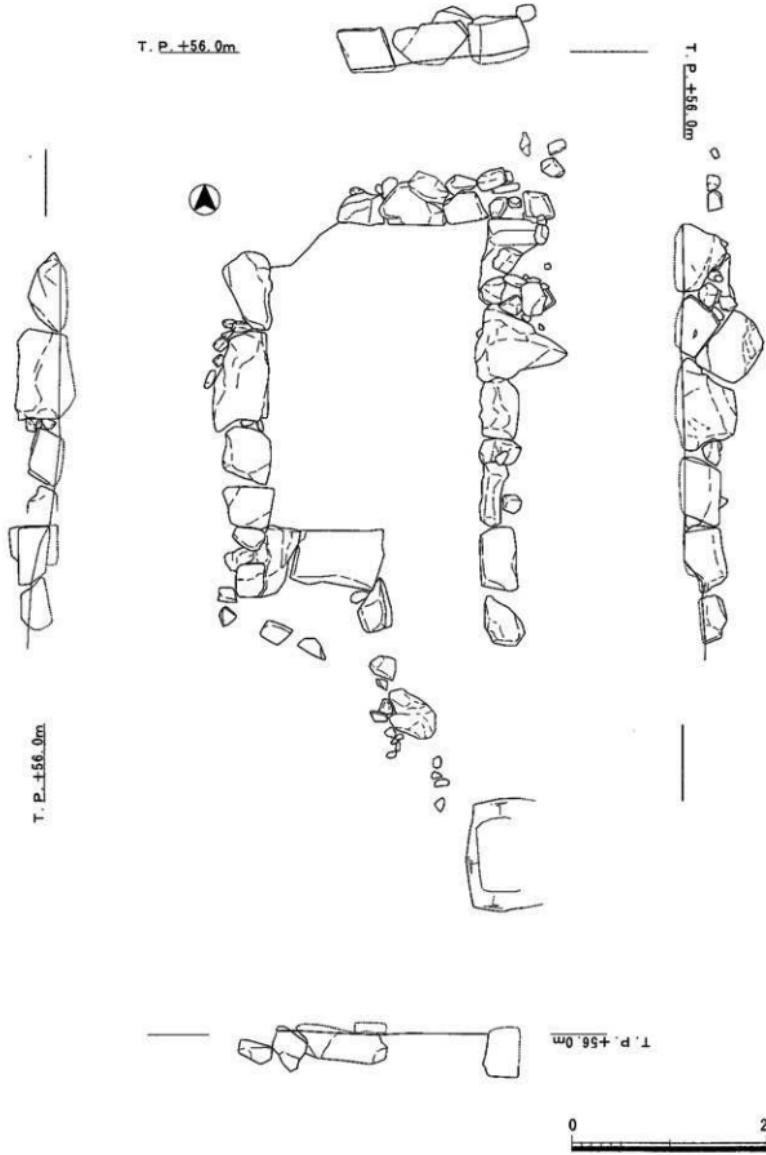
基底部のみであるが石室に使用している石材は、東方で産出する花崗岩が使用されている。玄室と羨道の石材の積み方は、石材を横位に用い、玄室の東壁・西壁に5列、奥壁に4列の石材を並べている。2段目は東壁の奥から2番目が残存するだけである。壁裏には拳大～人頭の大きさの石を使用されているが、石材は風化した脆い石が多く使用されている。玄門部の袖石には、やや大形の石材を横位にして設置されている。玄門部から羨道へ1.5m地点では、石列が途切れしており、後世に削平されたものと思われる。



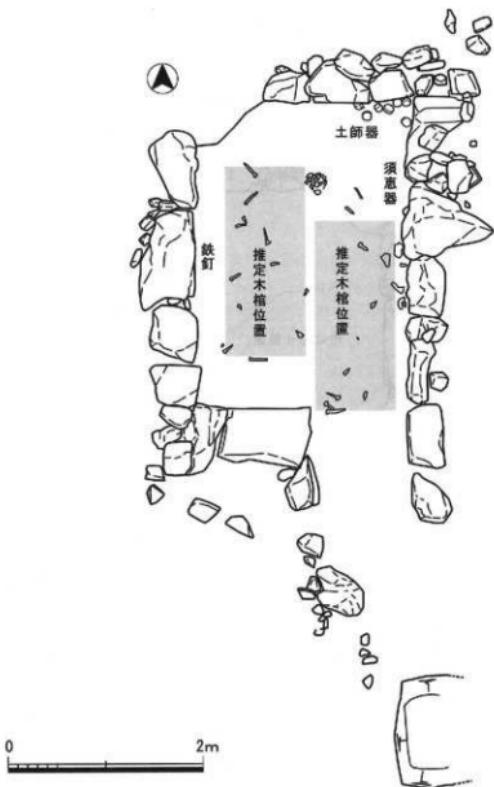
第18図 石室位置図及びトレンチ配置図 (S=1/400)



第19図 断面図 (S=1/100)



第20図 石室平面図及び展開図 (S=1/50)

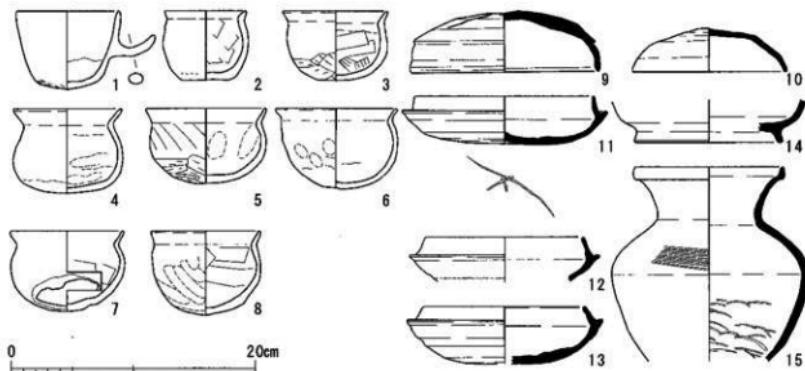


第21図 石室内出土遺物及び木棺設置場所想定図 (S = 1/50)

鉄釘が玄室内から検出ており、木棺に使用されていた釘と思われる。出土した釘の配置を見ると玄室の西側1棺と玄門付近に1棺の2棺が置かれていたと推測される。木棺は、釘の検出部分から木棺の大きさは幅0.6m前後、長さ1.8mの平面プランが想定される（第21図参照）。

③ 出土遺物

遺物は、石室内からは鉄釘以外に副葬品と思われる土師器、須恵器が出土している。土師器は玄室奥の北東角の床面付近からまとめて出土している。須恵器は東壁付近と玄室中央よりやや南側からやや床面より浮いた状態で出土している。また、土師器はほぼ完形のまま出土しているが、須恵器はすべて破片であった。土師器の器種は、把手付コップ形土器（1）1点、小型鉢（2～8）7点で、2は口縁が短く平底、3～8は丸底である。須恵器は杯蓋（9・10）、杯身（11～13）、杯（14）、壺（15）などである。時期は土師器が6世紀前半ごろに比定される。須恵器は9・11～13が6世紀前葉～中葉ごろ（陶邑編年のII-1・2）、10が6世紀末から7世紀初め（陶邑編年のII-5）、14が7世紀末頃（陶邑編年のIII-3頃）に比定される。



第21図 玄室内出土遺物実測図 (S=1/4)

鉄製品法量一覧表

遺物番号	品名	法量 長さ(cm)	残存率 (%)	備考
16	釘	17.5	100	
17	釘	10.3以上	60	木片付着
18	釘	16以上	90	
19	釘	17.9以上	90	
20	釘	17.8	100	
21	釘	17	100	
22	釘	11.2	60	
23	釘	19.2	100	
24	釘	10以上	50	木片付着
25	釘	7.4以上	30	
26	釘	12以上	60	
27	釘	13以上	70	
28	釘	11.6以上	60	
29	釘	12.2以上	70	
30	釘	5.0以上	25	
31	釘	8.9以上	40	
32	釘	11.9以上	60	
33	釘	5.8以上	20	木片付着
34	釘	5.6以上	30	
35	釘	7.4	40	
36	釘	5.8以上	40	
37	釘	3.3以上	20	
38	釘	4.9以上	30	
39	釘	6.9以上	40	
40	釘	3.4以上	20	
41	柄頭?	3.6	100	

鉄製品では、木棺に使用されていたと思われる釘（16～40）が25点出土している。17・24・33には木片が付着している。奥壁付近から太刀の柄頭の一部と思われる鉄片（41）1点が出土している。

④ 墳丘

当古墳の発見前の状況は、造成で削平および埋められていた。石室の西と北側ではすでに削平を受けており、墳丘の痕跡はない。東と南側では造成による盛り土で埋めており、墳丘の残存が考えられ、石室に対し直角に東西トレンチ、南は羨道の入口方向に南北トレンチを設定した。その結果、墳丘盛土はすでに削平されていた。東西トレンチの東端部分では扇状地の地山層が上がっているのが確認された。南トレンチでは墳丘盛土である可能性があるものの断定はできない。

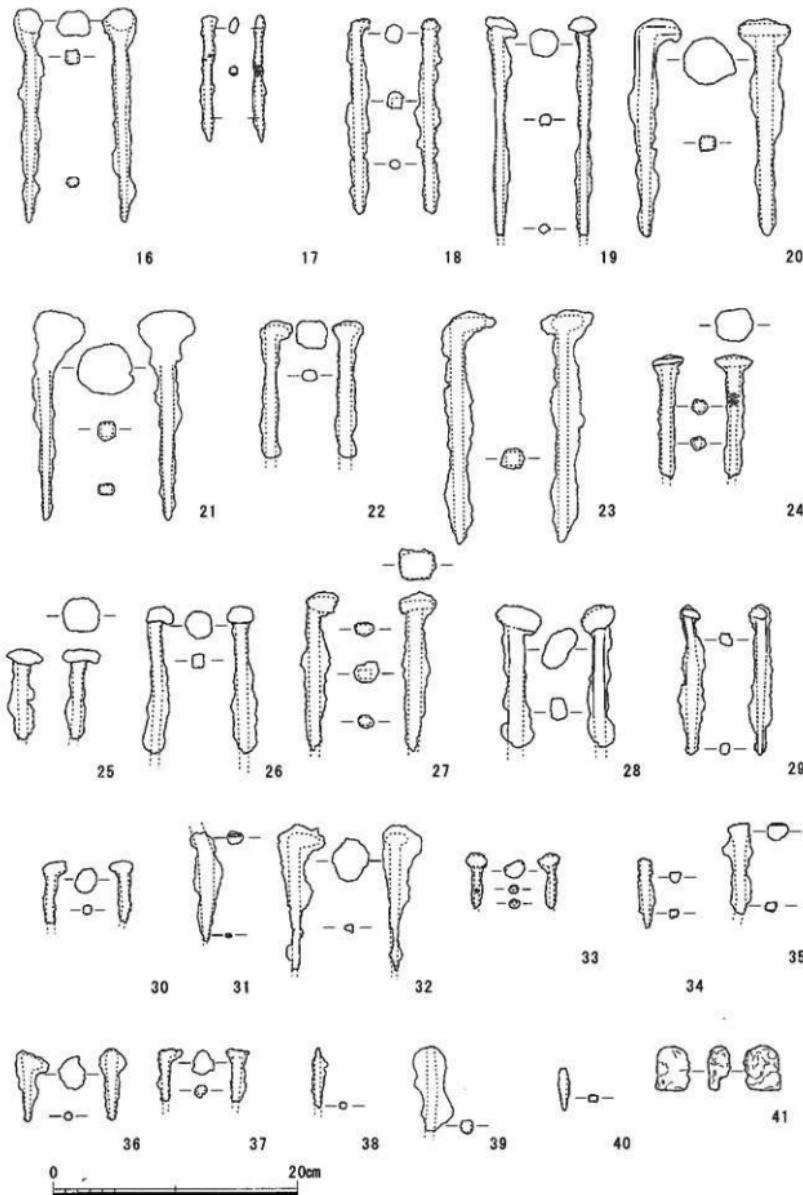
2.まとめ

今回の調査は、遺構確認調査により発見された古墳である。ここでは調査成果からわかったことについて述べる。今回の古墳の調査で判明したことは以下の通りである。

- 1) 黒谷10号墳は、石室・羨道の大半が削平されていたが、残存する出土土器などから6世紀前半に築造され、7世紀末ごろまで追葬されていた古墳である。
- 2) 出土した鉄釘から木棺が埋葬されていたことが想定される。鉄釘の出土位置から2棺の木棺を埋納されていたと推測される。また、玄門付近の木棺は、追葬された棺と思われる。
- 3) 石室内の副葬品は太刀の柄頭の一部と思われる鉄製品と土器を出土したのみであることから、後世の時期に盜掘されている可能性が考えられる。
- 4) 石室の平面プランは、玄室幅が玄室長に対し広い。

参考文献

- ・高萩千秋 1993「高安古墳群芝塚古墳」(財)八尾市文化財調査研究会報告38



第22図 玄室内出土鉄製品実測図 ($S = 1/4$)



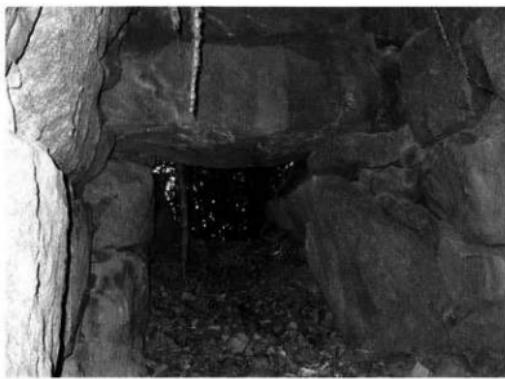
郡川 1号墳(開山塚)開口部 南西から



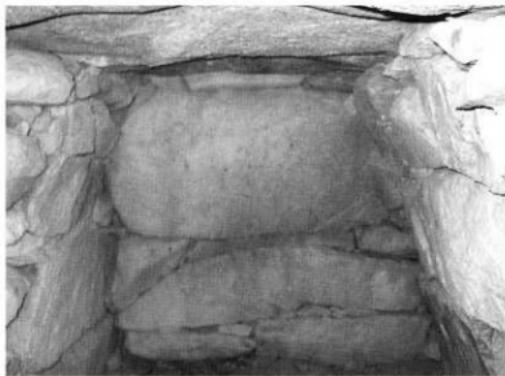
郡川 1号墳(開山塚)玄室から玄門方向(左が天)
(撮影 河南辰秀氏)



郡川 2号墳 玄室から玄門方向



郡川3号墳 玄室から玄門方向



郡川4号墳 奥壁



郡川5号墳 墓丘 西から



郡川7号墳 墳丘 南西から



郡川8号墳 墳丘 西から



郡川9号墳 玄門部



郡川10号墳 南西から



郡川10号墳 玄門部(左が天)



郡川11号墳 開口部 西から(1998年)



郡川11号墳 前室から後室方向(1998年)



郡川11号墳 後室から前室方向(1998年)



郡川12号墳 南西から



郡川12号墳 玄室から開口方向



郡川13号墳 西から



郡川14号墳 南から



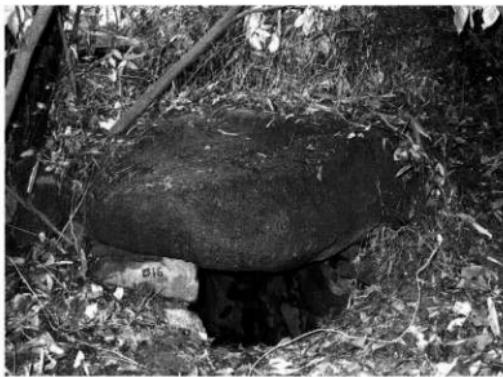
郡川15号墳 開口部 南西から



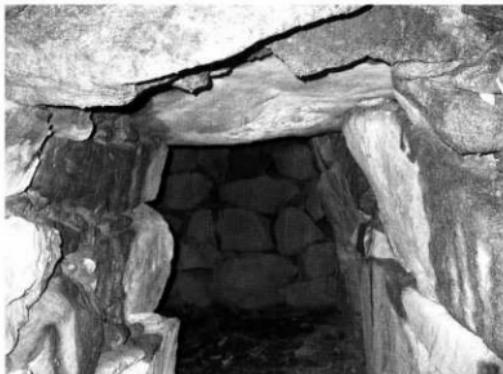
郡川15号墳 玄室から玄門部



郡川16号墳 開口部(2000年)



郡川16号墳 開口部



郡川16号墳 羨道から玄室方向



郡川16号墳 奥壁(左が天)



郡川16号墳 玄室から玄門方向



郡川17号墳 開口部 南西から



郡川17号墳 玄室から玄門部



郡川18号墳 墳丘 東から



郡川18号墳 奥壁(左が天)



郡川18号墳 玄室から玄門方向



郡川19号墳 墓丘 南西から



郡川19号墳 奥壁(左が天)



郡川20号墳 墓丘 南西から



郡川21号墳 義道石材 西から(左が天)



郡川21号墳 玄室左側壁石材 西から



郡川22号墳 墳丘 南西から



郡川22号墳 義道から玄室方向



郡川23号墳 墳丘 東から



郡川24号墳 左側壁 西から



郡川24号墳 左側壁 南西から



郡川25号墳 開口部 南から



郡川26号墳 側壁石材とみられる石 南西から



郡川27号墳 墳丘 北西から



郡川29号墳 玄室より玄門方向(左が天)



郡川30号墳 墳丘 南西から



郡川30号墳 奥壁



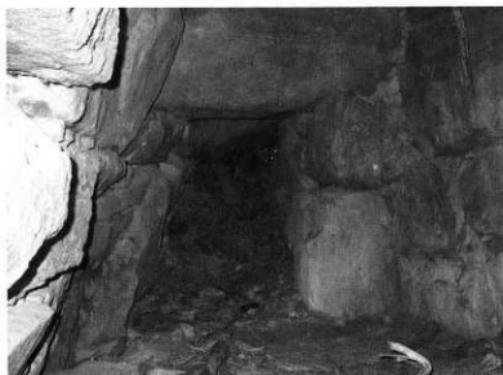
郡川30号墳 玄室から玄門方向(左が天)



郡川31号墳 墳丘 南西から



郡川32号墳 奥壁



郡川32号墳 玄室から玄門方向



郡川33号墳 墳丘 北東から



都川33号墳 北から



都川33号墳 石室内 左側壁



都川34号墳 玄室 左側壁



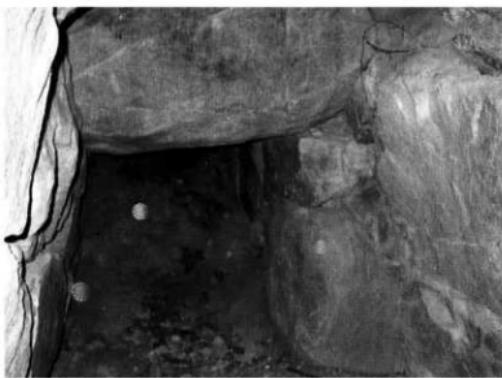
郡川35号墳 奥壁(左が天)



郡川35号墳 墳丘 南西から



郡川36号墳 石室 北側奥壁崩落部から



郡川36号墳 石室 玄門部



郡川37号墳 墓丘 南から



郡川38号墳 墓丘 南東から



郡川39号墳 墓丘 南から



郡川40号墳 墓丘 西から



郡川41号墳 墓丘 北から



郡川42号墳 南西から



黒谷7号墳 石室 南西から

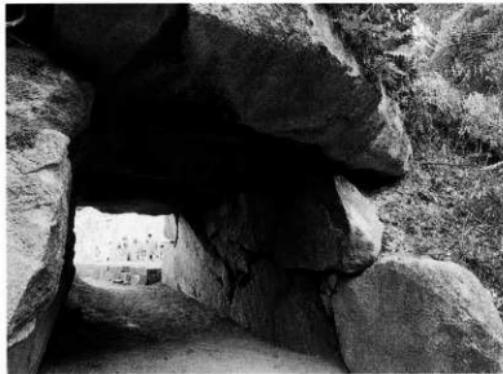


黒谷8号墳 玄室 左側壁

図版23 大塙・山畠7号墳(抜塚)



墳丘 南西から



羨道開口部から



羨道と残存墳丘 玄室側から
(撮影 阿南辰秀氏)



大塙・山畠 8号墳 南西より
(撮影 阿南辰秀氏)



大塙・山畠 6号墳 石室 開口部



大塙・山畠 6号墳 墳丘 西から



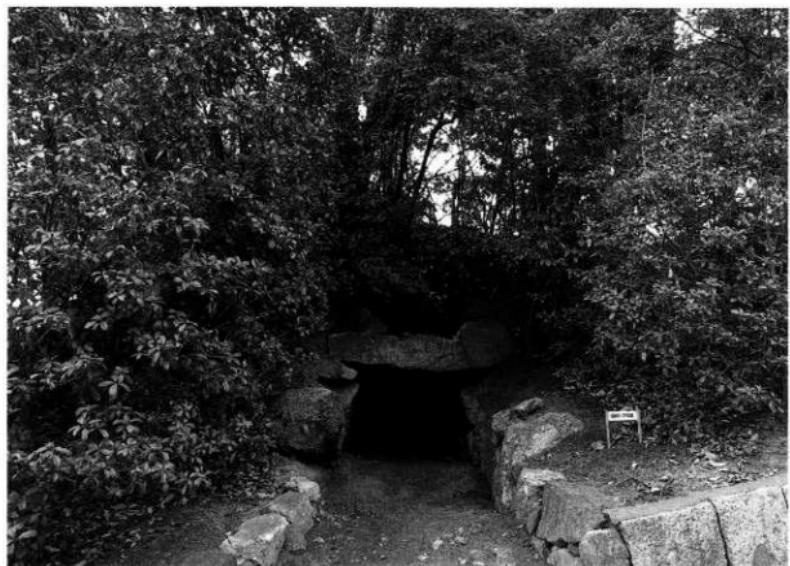
羨道から玄室方向



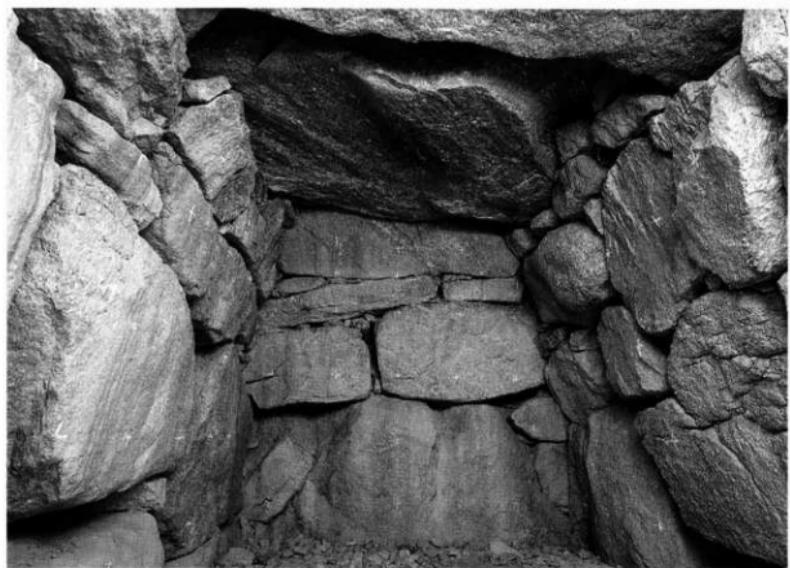
奥壁方向(左が天)



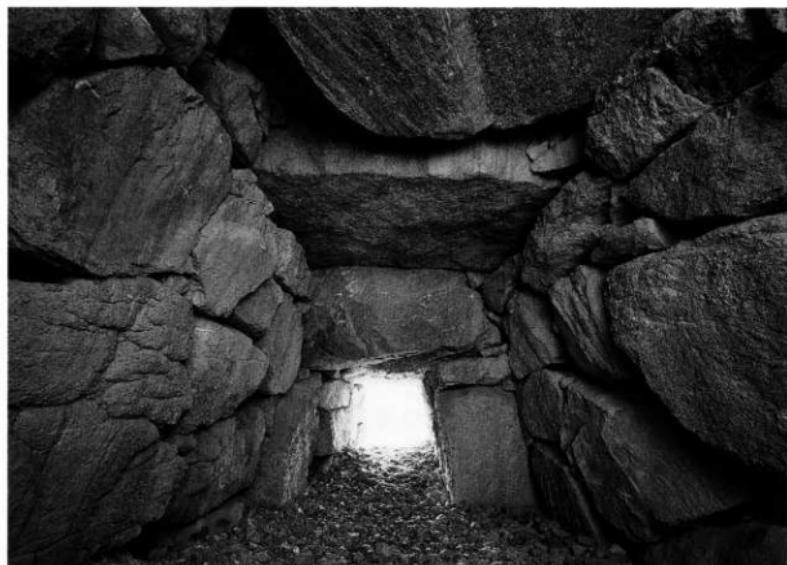
玄室から開口方向(左が天)



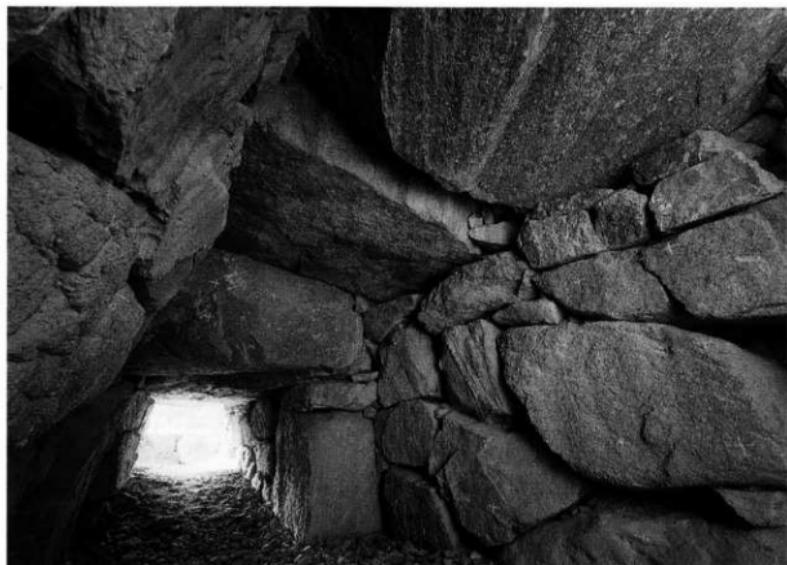
墳丘 南西から



奥壁
(撮影 阿南辰秀氏)



玄室から羨道方向



玄室から羨道方向
(撮影 阿南辰秀氏)